

A New Approach to China local cultural study focusing on local drama and religious ritual in Jiangsu Southeast Area

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ueda, Nozomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034724

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



江蘇省東南部の伝統芸能と民間信仰
をめぐる中国地域文化研究の試み
如皋童子戯の物語世界

課題番号：18520262

平成19年度科学研究費補助金
基盤研究（C）研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者 上田 望
金沢大学文学部准教授

目次

序	1
《三界表》 解題、校注及び影印（上田 望・朱 瑞平校注）	3
《兄妹分裙》 校訂及び影印（上田 望・朱 瑞平・林 志英校）	41
越境する地方劇－江蘇如皋童子戯の三種類の表現形態（上田 望）	89

序

本研究は、科学研究費（基盤研究 C）「江蘇省東南部の伝統芸能と民間信仰をめぐる中国地域文化研究の試み」（平成 18 年～ 19 年度，研究代表者：上田望，以下「中国地域文化研究の試み」と略）の研究成果の一部をまとめたものである。この研究課題は、中国各地に伝承される無数の伝統的な講唱芸能・演劇が相互にどのように関わり、形成されてきたのかを、音曲と歌辞の面から解明しようとした「中国伝統芸能の音曲と歌辞の関係についての計量的研究」（平成 16 年～ 17 年度科学研究費（基盤研究 C），研究代表者：上田望，以下「中国伝統芸能の計量的研究」と略）の研究成果を受け継ぎつつ、それとはまた別の角度から資料の分析をおこない、中国の講唱芸能・演劇研究に関する新たな研究手法を開拓しようと試みてきた。

話が前後するが、平成 16 年から 17 年度にかけて「中国伝統芸能の計量的研究」では、

- 1) 音曲と歌辞に関するデータを文献や現地調査から収集し、これらを電子データ（MIDI ファイルなど）に変換して整理し、データベースとして蓄積する。
- 2) 分析プログラムを用いてこれらの電子データを処理し、音の連続性などいくつかの指標から音曲の特長を計量的に分析する。
- 3) 長期的な目標としては、電子データのデータベースをより充実したものにした上で、音曲の異同や歌辞の継承関係からみた中国の講唱芸能・演劇分布地図を作成し、講唱芸能・演劇を総体的に把握する。

という 3 段階の研究目標を掲げていた。

この目標を達成するために 2 年間で江蘇省南通市・如皋市、シンガポール、香港などで現地調査を実施し、講唱芸能や演劇の映像資料や文献資料を収集している。そして、これらの音楽の一部を電子化し、既刊の芸能・演劇の楽譜のデータと併せて、音曲解析プログラムと統計処理プログラムを用いて各地の芸能や演劇の音楽面よりみた親疎関係を分析する方法を編み出し、中国における芸能・演劇の伝播について些か知見を得ることができた。

しかしながら、2 年間という限られた時間の中で、海外での現地調査と平行して音楽データを整理、分析するのに追われたため、歌辞データについては文献資料（主として如皋童子戯の唱本）を現地調査により相当数収集しているにもかかわらず、遺憾ながらそれらを十分に整理・活用できたとは言い難い。

そこで、平成 18 年度からは「中国地域文化研究の試み」という新たな研究課題のもと、音楽データの整理・分析と併せ、文献資料についても本格的に整理と分析を進めてきた。具体的には、

- 1) 江蘇省・浙江省に現在も伝承されている、シャーマニスティックな演劇・芸能に狙いを絞り、如皋童子戯の十数種の唱本をはじめ、南通童子戯、金湖香火戯などの重要な唱本、浙江省、福建省伝存の唱本・脚本を電子化し、整理した。
- 2) 如上の電子テキストを N-Gram を用いて分析しそれぞれの使用頻度の高い文字・語彙を抽出し、テキストに内在する芸能・演劇独自の「文法」や隠されたテーマを明らかにしようと試みてきた。更に、「中国伝統芸能の計量的研究」でも用いたクラス

ター分析の手法によって歌辞の面から各種の演劇・芸能の親疎関係を可視化することにも取り組んできた。

本報告書では、整理・校訂した童子戯のテキストの中からそのジャンルの特質を体現していると考えられる作品を選び、そのテキストと写真、そして 2007 年 9 月に香港で開催された「中國戲劇與宗教學術研討會」（香港浸會大學中國語言文學系、宗教及哲學系の主催）において口頭発表し、『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第 10 輯（2007 年 12 月）に掲載された「地方戲的越界—論江蘇如皋童子戯的三種表現形態—」の日本語版を収載する。

今までのところ、中国の講唱芸能や地方劇の電子データの整備状況は古典小説や古典演芸の浩瀚な電子コーパスに比べると寥寥無幾と言っても過言ではなく、王順隆氏による閩南語俗曲唱本「歌仔冊」のデータベース（<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>）が唯一突出しているが、潮州歌冊に収録対象が限定されている憾みがある。中国国内でも北方曲芸網（<http://www.bfqy.com/Index.asp>）、中国評彈網（<http://hk.netsh.com/eden/bbs/875/>）、遊俠温州鼓詞網（<http://www.ming5.com/gc/default.asp>）など各ジャンルのサイトが愛好家などによって立ち上げられ、その中にテキストデータ（電子文本）が散見されるものの、著作権の問題も絡んで、講唱芸能や地方劇のテキストデータベースの全面公開にはまだ幾多の障碍がある。今後は研究者や上演者、愛好家の間で問題意識を共有し、立ち遅れの感のある電子コーパスを構築していくことが、この分野の研究の発展に大きく影響すると思われる。編者も参画している「中国近世白話文学の電子化状況情報及びコーパスの共有基盤の構築に関わる基礎的研究」（科学研究費・基盤研究（B）、研究代表者：笠井直美名古屋大学准教授）などがその研究成果を社会に還元し、積極的にサポートしていくことが望ましいであろう。

編者が企図していた中国の講唱芸能・演劇分布地図作製にはまだまだ長い道のりが横たわっているが、すでに先駆的な業績を上げている漢字文献情報処理研究会や中国都市芸能研究会、隣接する他の各国文学研究、言語学の分野での情報処理研究などをモデルに、中国の講唱芸能・演劇のテキストデータや音楽の電子データの整備があまり進んでいない環境下で、この数年間、統計処理による解析の試みを進めてきた。研究の緒についたばかりで遺漏や錯誤などもあろうかと思われるが、本報告書を公開し大方のご批正を願う次第である。

最後になったが、本研究でも北京師範大学の朱瑞平先生には引き続きいろいろとお世話になった。テキストのデータ入力については馬嘯晴氏、林志英氏、（北京大学中文系碩士課程在籍）、張雅静氏（金沢大学人間社会環境研究科後期課程在籍）から多大な協力を得た。ここに改めてご支援・ご教示を賜った方々のお名前を記し、心よりお礼を申し上げる。

2008 年 3 月 22 日
上田 望 記

《三界表》 解題

上 田 望

《三界表》は如皋童子戯、否、江蘇省各地に分布する童子戯（香火戯）に共通してみられる重要な儀礼のテキストであり、儀礼性とは別にこれ自体、民間信仰の豊かな想像力に裏打ちされた物語性を有している。

如皋以外にも、通州市、金湖市などの童子戯にはいずれも《三界表》あるいはその一部を構成する《天仙表》、《陽元表》、《幽冥表》があるが、まず、如皋の《三界表》に従ってその梗概を記す¹。

1) 上界表

魏徴の息子、魏八郎は白い装束を整えると、天界に赴き玉尊（玉皇大帝）の降臨を請い願うため出発しようとするが、法司（巫師、童子のこと）にとめられる。魏八郎は唐三蔵を天竺まで乗せた白龍馬と玉尊への公文（天仙表）とを授かり、細々と注意を受ける。

空へ舞い上がった八郎は脇目もふらず、一直線に天界を目指し、南天門を通過して玉尊の鎮座する靈霄殿に参上すると、公文を上呈する。玉尊は、八郎にどこから来たのか、その来意について問う。

八郎は、中華江蘇如皋市（あるいは南通市、あるいは如東県）のある家で会を催すに際し、玉尊の来臨を請うため会首が自分を使わしたのでであると上奏する。

玉尊は喜んで八郎に回文を下し、八郎は謝意を述べる。さらに八郎は火徳星君をはじめとする五方の神々、十二宿の星官、張という姓の土地神、蝗を管掌する神も招請し、神壇には酒食を設け、会終了後の高報酬を約す（この最後の部分は省略が多く意味不明の個所がある）。

2) 中界表

天仙表を上呈したあと、今度は二通目の公文を齊王（東嶽大帝）に届けることになり、法司の要請を受けて、魏九郎は急いで衣装で身支度を調える。

出発しようとした九郎は、法司にとめられ、黄彪馬と齊王への公文（陽元表）とを授かり、細々と注意を受ける。

¹ 如皋の《三界表》は如皋市東陳鎮山河村在住の夏伯銀氏手抄本の写真に基づく（朱瑞平氏撮影）。夏伯銀氏の経歴については上田望編著『中国伝統芸能の音曲と歌辞の関係についての計量的研究—越境する伝統芸能—江蘇如皋童子戯の事例研究から』（平成16-17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 2006) pp30-36を参照。それ以外の《三界表》については、曹琳著《江蘇省通州市橫港郷北店村胡氏上童子儀式》（財団法人施合鄭民俗文化基金會, 1995, 民俗曲芸叢書）所収《九支表文》、《幽冥表抄本複印件》、曹琳著《江蘇省南通市閘東郷公園村漢人的免災勝會》（財団法人施合鄭民俗文化基金會, 1996, 民俗曲芸叢書）所収《天仙表》、曹琳校注《江蘇南通童子祭祀儀式劇本》（財団法人施合鄭民俗文化基金會, 2000, 民俗曲藝叢書）所収《魏五郎遊十八關》、姜燕編著《香火戯考》（廣陵書社, 2007）所収《三界表》を参照。

空へ舞い上がった九郎はまっしぐらに**東峰殿**へ赴き、齊王に拝謁して公文を上呈する。齊王は、九郎にどこから来たのか、その来意について問う。

九郎は、中華江蘇如皋市西北のある家で会を催すに際し、齊王の来臨を請うため会首が自分を使わしたのでであると上奏する。

齊王は喜んで九郎に回文を下し、九郎は謝意を述べる。さらに九郎は東嶽のみならず、西嶽、南嶽、北嶽の神や西王母、灶君、張という姓の土地神、蝗を管掌する神も招請し、神壇には酒食を設け、会終了後の発展を期す。

3) 下界表

陽元表を上呈したあと、今度は三通目の公文を**幽冥教主（地藏王）**に届けるよう法司の要請を受けて、**魏五郎**は急いで黒い衣装で身支度を調える。

出発しようとした五郎は、法司にとめられ、**黒龍馬**と幽冥教主への公文（幽冥表）とを授かり、細々と注意を受ける。

幽界へと向かった五郎は、途中暗闇に包まれ視界を失うが、夜明珠の光によってさらに前進を続ける。そして破銭山から血の池地獄までの十八獄（関）を突破し、森羅殿へと到着する。幽冥教主に拝謁して公文を上呈する。幽冥教主は、五郎にどこから来たのか、その来意について問う。

五郎は、中華江蘇如皋市東南のある家で会を催すに際し、幽冥教主の来臨を請うため会首が自分を使わしたのでであると上奏する。

幽冥教主は喜んで五郎に回文を下し、五郎は謝意を述べる。さらに五郎は灶君、張という姓の土地神、蝗を管掌する神も招請し、神壇には酒食を設け、会終了後の発財を期す。その後、五郎は呼び止められ、途中茶館で渴をいやすようにとお金を与えられ、再び馬に乗り人間界に戻る。

以下、この《三界表》の特徴を考察する。

i) 如皋《三界表》の構造

如上の梗概でわかるように、非常にシンプルで繰り返しの構造になっている。

- ・ 上界表 会首→童子→符官（魏八郎） 白馬で靈霄殿へ移動 玉皇大帝 → 帰還
- ・ 中界表 会首→童子→符官（魏九郎） 黄馬で東峰殿へ移動 東嶽大帝 → 帰還
- ・ 下界表 会首→童子→符官（魏五郎） 黒馬で森羅殿へ移動 地藏王 → 帰還

これは会首の依頼を受け、童子が符官を使って三界の神を招くという神おろしの儀礼行為を、言語化、韻文化したものと言える。符官は童子の執り行う儀礼において重要視される存在であり、南通では5名の符官は特別に紙製の神像が作られる（魏五郎、八郎、九郎と唐三蔵、土地神）²。

また、如皋《三界表》に見える符官の造型は、如皋や南通の童子の服装と似た点が多い。例えば、符官のかぶる三尖鑽天冒や腰につける赤い布は、童子の三尖功曹帽や八幅羅裙（紅裙）と瓜二つであり、童子の分身が神おろしの行為を代行しているとも考えられる。

ii) 如皋《三界表》の文辞

如皋の《三界表》を通州、金湖などの他地域のものと比較するといくつかの共通点や相

² 注1 前掲《江蘇省南通市開東郷公園村漢人的免災勝會》p51 参照。

違点が浮かび上がってくる。

文辞については、如皋のテキスト（如）は、通州市横港郷北店村胡氏の《九支表文》に含まれる《天仙表》・《陽元表》・《幽冥表》（通）及び《幽冥表抄本》（抄）と共通する文字が多く見られる。また『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』に収められる《魏五郎遊十八闕》（南）も実は通州市四安郷陳張鈴手抄本、同市幸福郷李福田藏抄本を整理した通州系のテキストであり、以下の例に見えるように、いずれも「夜明珠托在手」という句が4種類のテキストで共通している。金湖の《三界表》（金）はもともと分量が他本に比べ少ない上、十八地獄を巡る描写がなく、該当個所の文辞がない。

如	望後矚矚不見行人往來	符使官在馬上陡生一計	夜明珠托在手亮光放開
通	朝後矚矚不見往來行人	符使官在馬上陡生一計	夜明珠托在手豪光分清
抄	陰世裡黑氣騰寸步難行	符使官在馬上陡生一計	夜明珠托在手毫氣騰騰
南	朝後矚矚不見來往行人	魏五郎在馬上忙取寶貝	夜明珠托在手亮亮錚錚

しかしながら、如皋のテキストと金湖のものに全く関係がないかと言うとそうでもなく、《三界表》の該当する部分があるところで比較してみると、以下の例のように、通州のテキストよりも金湖のものの文辞のほうが似通っているケースもあり、各地の童子戯テキストの系統上の近縁性が示唆される。

如	八郎官看不清天空景致	望遠見靈霄殿霞光紛紛	東廊下懸的是龍鳳花鼓
金	八郎官看不盡天空景致	遠望見靈霄殿大放光明	××××××××××
南	雲裡走霧裡奔來得好快	遠望見靈霄殿朝見玉尊	東廊上有一面龍鳳畫鼓

iii) 如皋《三界表》の登場人物とストーリー

次に登場人物とストーリーのディテールに注目してみると、大きな問題を含む差異が各地のテキストに看取される。

【表1 《三界表》の表文の種類と登場人物】

	通州(横)	如皋	金湖
龍宮表	不明	-	-
仏國表	大郎	-	-
南山表	不明	-	-
北朝表	不明	-	-
天仙表	八郎	八郎	八郎
陽元表	九郎	九郎	九郎
幽冥表	五郎	五郎	五郎
壽星表	六郎	-	-
三官表	七郎	-	-

通州市横港郷の《九支表文》は、その名の通り、9通の表を龍王を初めとする神々に魏兄弟9名がそれぞれ届ける。一方、如皋や金湖の《三界表》では三界の神（玉皇大帝、東岳大帝、地藏王）と魏八郎、九郎、五郎しか登場しない。また、《魏五郎遊十八関》は《三界表》の《下界表》に相当し、通州の通州市四安郷陳張鈴手抄本、同市幸福郷李福田藏抄本に基づくテキストであることは前述したが、八郎、九郎、五郎の名前しか見えないため、同じ通州の《九支表文》とは根本的に異なるようである。

また、もう一つ大きな違いとしては、《幽冥表》（下界表）の十八関（層）地獄巡りの物語がある。金湖の《下界表》には魏五郎が地藏王に拝謁するため、十八関の地獄を通り抜けていく場面の描写が全く無い。各地獄の様相が詳述されているテキストとしては、如皋の《下界表》（如）のほかに、通州市横港郷の《幽冥表》（通）、《幽冥表抄本》（抄）、《魏五郎遊十八関》（南）があり、そこで描かれる十八の地獄名とその配列は以下のようである。

【表2 各地の《三界表》と十八関地獄】

	通州《幽冥表(横)	通州《幽冥表(抄)	《遊十八関》(南)	如皋《下界表》(如)
1	破銭山	破銭山	破銭山	破銭山
2	鬼門関	悪犬村	悪犬村	奈何橋
3	王婆店	鬼門関	鬼門関	將軍柱
4	望郷台	奈河橋	奈河橋	十惡関(油鍋)
5	奈何橋	神雞関	神雞関	十惡関(磨子)
6	悪犬巷	鐵圀城	鐵圀城	十惡関(鋸子)
7	雞飛関	望郷台	望郷台	寒冰獄
8	剥衣亭	剥衣亭	剥衣亭	悪犬莊
9	放火坑	瘋子関	臘子関	割舌坑
10	割舌関	王婆店	王婆店	放火坑
11	鐵圀城	枉死城	枉死城	王婆店
12	秤稱獄	夾棍山	夾棍山	尖刀山
13	孤児墳	放火坑	放火坑	望郷台
14	枉死城	血湖池	血湖池	血湖池
15	血湖池	割舌山	割舌山	
16	善惡報	鑊湯獄	鑊湯獄	
17	十惡関	秤稱獄	秤稱獄	
18	尖刀関	尖刀山	尖刀山	

通州系のテキストでは、十八の地獄が逐一描かれるのに対して、如皋の《下界表》では若干省略されている。何が十八地獄かは諸説があるので、ここではその問題には踏み込まないが、出てくる地獄の配列だけでなく、寒冰獄を独立した地獄に数えるなど、通州系と

の異同は少なくない。

登場人物と十八閻地獄に関するストーリーの異同を簡単に整理すれば以下のである。

【表3 《三界表》の表文数と十八閻地獄の有無】

	通州(横)	如皋	金湖
表(符官)	9	3	3
十八地獄	有	有	無

最後に如皋の《三界表》の地域性についても言及しておきたい。

如皋本は十八閻地獄(実際は十四)の中でも特に最後の血池地獄にかなりの紙幅を割き、「血盆経」をあげて婦女を救うよう説く。これは金湖の《三界表》を除く全てのテキストにはほぼ共通するものである。田仲一成氏は、南通童子の消災会が単なる驅邪押煞の巫術ではなく、孤魂超度に重点を移した「建醮儀礼」に近いものであることを指摘されるが³、この十八閻地獄の描写、就中、血池地獄の場面や、さまざまな亡霊の類型を縷々述べ、7月30日に超度されることを暗示する鬼門閻の段などは、如皋や通州を含む南通地区において孤魂超度儀礼の要素が《三界表》にも後から加えられていったことを示唆しよう。

また、《三界表》には多くの神が登場するが、唯一、如皋本にしか登場しないのがイナゴを監督する「𧈧蚱將軍」と呼ばれる神であり、各表の最後で「張土地」と呼ばれる土地神とともに必ず招請されている。もっとも、この南通地区は慢性的にイナゴに悩まされてきたらしく、通州市の横港郷北店村では代々、「蝗神会」を挙げており⁴、「𧈧蚱將軍」が出てくることは如皋の独自性という訳ではないが、土地神信仰が盛んで小規模の土地廟が非常に多いこととあわせ、この地域の性格がテキストに反映されていると見てよからう。

最後に、《三界表》では一個所、その名前が見えるだけであるが、「閻索」もこの地域と深い関わりを持つ人物である。「花閻索」を主人公とする《成化説唱詞話》が発見されたのは江蘇省嘉定県(1992年から上海市嘉定区)である。この《三界表》だけでは残念ながらどのような物語が付随していたのか見えてこないが、明代以降、この地域では閻索は文献に姿を現すことなく、伏流水のように口碑で脈々と受け継がれていったのであろうか。
(完)

³ 田仲一成『中国巫系演劇研究』(東京大学出版会、1993)第2章 p862 参照。

⁴ 注1前掲《江蘇省通州市横港郷北店村胡氏上童子儀式》pp28-29 参照。

三界表全本（三個十字）

敬業一心堂

夏伯銀抄

上田 望 朱 瑞平 校注

校注說明

凡屬誤字、俗字、脫落、漫漶、衍文等處，皆分別校改，寫為校記，或加注說明。不能辨識之字，用口符號標示。“音同”、“音近而誤”均指如皋方言讀音而言。

畫字①以②畢

封表現③成

三界符官④

馬駕祥雲

金鼎銀晏燈⑤

茶酒初獻送公文

壇前內有三封表

會首畫字甚先成

會首執筆畫下字

封批⑥封得⑦緊騰騰

表上押起三個印

兩條金龍⑧左右分

①《江蘇省南通市開東鄉公園村漢人的免災勝會》(151 頁)云：“跳筆畫字，又名跳筆聖。一童子舉狼毫毛筆，揚龍樓黃元，在兩位童子鑼鼓伴和下，三人唱舞筆獻酒”。

②原寫作“以”，今正。通州《九支表文·5 天仙表》(以下簡稱通州《天仙表》，369 頁)云：“封表已畢，畫字現成”。

③原寫作“先”，以意正。

④《江蘇省南通市開東鄉公園村漢人的免災勝會》(51 頁)云：“符官，信使，他們是受童子委託，向各路神靈投送表文，邀請赴會的中介人”。

⑤“晏燈”，整夜不滅的燈火。

⑥原寫作“被”，以意正。

⑦“得”，原誤作“德”。下同。

⑧通州《天仙表》(369 頁)云：“表內貫的公文帖，外邊盤上二龍神。兩條龍來有說法，一條雄來一條陰”。

1

上界天仙八郎官	斗牛宮中請玉尊①
手拿鎖子②開箱子	取出頭盔共衣衿
頭戴③三尖鑽④天帽	大紅一朵面門君⑤
腰繫⑥千紅⑦一丈二	登⑧雲靴子足下登
收拾⑨打扮⑩方才了	後槽⑪牽⑫出⑬馬能行
龍馬牽到壇臺下	刨刨⑭刷刷請玉尊
龍馬當壇喂個飽⑮	羅木鞍轡⑯分上身⑰
符官上馬就要走	法司採住馬韁繩
符官問道留甚記	未成祝表請玉尊
上界八郎 跳下能行⑱	重用走⑲ 慢點行
巫人囑咐你動身	與你一匹白龍馬
白馬白鞍⑳白踏蹬㉑	項下鈴兒響叮聲

① “玉尊”，指玉皇大帝。

② “鎖子”，鑰匙。通州《九支表文·1 龍宮表》（以下簡稱通州《龍宮表》，355 頁）云：“手拿鑰匙開箱籠”。

③原寫作“代”，俗代、戴同。

④原寫作“專”，以意正。下同。

⑤此句義未解，或有誤。通州《天仙表》（369 頁）云：“頭戴三尖鳳翅盔，大紅絨球插頂門”。南通《天仙表》（136 頁）云：“頭戴三尖功曹帽，絨球一朵頂面門”。

⑥原寫作“計”，同音而誤，今正。後文又作“細”，今依此一律改作“計”，下文不再出校。

⑦“千紅”，俟考。《花關索出身傳（前集）》云：“乾紅袍罩黃金甲，前後青銅竟奄心。”《花關索傳之研究》校注（99）云：“乾紅，待考。或為絳紅之誤”。南通《天仙表》（136 頁）云：“腰束官紅一丈二”。通州《天仙表》（369 頁）云：“腰繫束官紅一丈二”。據《江蘇省南通市開東鄉公園村漢人的免災勝會》（36 頁），南通童子演唱時，繫上紅裙，此紅裙稱“八幅羅裙，又稱九宮八卦裙，大紅土布製作。裙幅長一七四公分，裙高九十公分”。

⑧原寫作“蹬”，以意正。

⑨原寫作“計”，以意正。

⑩原寫作“辦”，以意正。下同。

⑪原寫作“曹”，以意正。下同。

⑫原寫作“仟”，同音而誤，今正。下同。

⑬原寫作“出”，“出”之俗字。下同。

⑭原寫作“抱抱”，今正。通州《九支表文·4 北朝表》（以下簡稱《北朝表》，366 頁）云：“龍馬牽到壇臺外，潔淨潔淨刷刷刨”。

⑮原寫作“寶”，同音而誤，今正。

⑯原寫作“按橋”，同音而誤，以意正。

⑰“分上身”，義未解。通州《九支表文·2 佛國表》（以下簡稱《佛國表》，359 頁）云：“龍馬堂上餵個飽，鞍鞵踏蹬搭上身”。

⑱“能行”，能行馬。如皋《魏九榮出世》云：“家人牽出能行馬”。

⑲“重用走”，義未解。或疑“從容”之誤。通州《龍宮表》（356 頁）云：“神人帶住慢慢用，符官問道為什佸？未曾作表到龍宮，從容走來馬從容”。待考。

⑳原寫作“稜”，疑“鞍”之俗字，今正。下同。

㉑原寫作“達登”，今正。下同。通州《北朝表》（366 頁）云：“紅馬紅鞍紅踏蹬”。 2

.....

屁股①用的銀班首②	扒心③肚帶④白如銀
此馬不比凡間馬	也能三界去請神
曾馱⑤當年小唐僧	去到西天取真⑥經
取得真經回東土	傳與世界萬萬僧⑦
只因壇前無好馬	當壇勅賜八郎神
白龍馬	對上天仙疏一分
住一住	停一停
吟詩一首請玉尊	
二木孛⑧為林	關索⑨問關平⑩
老爺歸何處	騎馬過松林
符官吟罷⑪詩一首	串⑫成十字請玉尊
第⑬一封	天仙疏
當壇交代	
小巫人	請囑咐
去請玉尊	

①原寫作“古”，今正。

②此句待考。通州《佛國表》（359 頁）云：“身披肚帶銀斑口”。《北朝表》（366 頁）云：“口上戴的龍頭鬮，攀胸肚帶孔雀毛”。

③“扒心”，俟查。或疑“攀胸”之誤。

④原寫作“代”，以意正。南通《九郎借馬鬪東海》（174 頁）云“肚帶三條老龍皮。”

⑤原寫作“駝”，以意正。通州《天仙表》（370 頁）云：“當年馱過唐三藏”。

⑥原寫作“增”，疑當作“真”，同音而誤。下同。通州《天仙表》（370 頁）云：“取得真經回東土，勸人行善早修行”。

⑦原寫作“增”，以意正。

⑧此字未詳。通州《佛國表》（360 頁）云：“二木必為林”。

⑨關索，關羽之次子。或稱“花關索”。明成化本《花關索傳》係以花關索為主角的說唱。參看《花關索傳之研究》。通州《佛國表》（360 頁）有“關索問關平”句。

⑩原寫作“屏”。關平，關羽之長子。

⑪原寫作“把”，以意正。

⑫原寫作“傳”，南通《魏九郎替父請神》(153頁)作“串”，今正。

⑬原寫作“弟”，俗弟、第通。

3

.....

當本進①	都土地②	神門法司
小巫人	奏文疏	交代符神
內公文	外封套	封套上印
一字字	一行行	寫③得分清
千④叮嚀	萬囑咐	路存⑤仔細
防風雨	休洩⑥濕	表疏公文
符使官	聽得說	連聲曉得⑦
接公文	跨上馬	騰霧駕⑧雲
雲裡⑨走	霧裡行	來得好快
遠望見	南天門	大放光明
前來到	南天門	仔⑩細觀⑪看
有周倉⑫	執大刀	把守天門⑬

①“本進”，待考。下文均寫作“請本坊”或“請本方”。

②“都土地”，下文寫作“張土地”。張土地，名叫張士鐸，其故事見於通州《謝土封神》(295頁)。

③“喜得分清”，義未解，疑“寫”當作“寫”，音近而誤。通州《九支表文·8壽星表》(385頁)云：“這封表這支帖巫人寫的，一行行二字字不差毫分”。

④原寫作“仟”，今正。

⑤此句，疑有誤。通州《佛國表》(360頁)云：“千叮嚀萬囑咐路上仔細”。通州《天仙表》(370頁)云：“千叮嚀萬囑咐路途仔細”。

⑥待考。通州《天仙表》(370頁)云：“狂風雨休得濕表帖半分”。

⑦原寫作“小德”，以意改。

⑧原寫作“祥”，今正。通州《九支表文·9三官表》(387頁)云：“騰雲駕霧下雲端”。

⑨原寫作“禮”，以意改。下同。

⑩原寫作“止”，以意正。

⑪原寫作“干”，以意正。

⑫三國時代，蜀漢關羽麾下的大將。

⑬《西遊記》云：“驚動高天上聖大慈仁者玉皇大天尊玄穹高上帝，駕座金闕雲宮靈霄寶殿，聚集仙卿，見有金光綵燄，即命千里眼、順風耳開南天門觀看。”金湖《三界表·上界表》(72頁)云：“一駕雲二駕霧來得其快，前來到南天門細看分明”。據此可知南天門在玉皇大帝居住

的天界(上界)，然通州《天仙表》中未見南天門以及周倉名。《九支表文·6 陽元表》(以下簡稱《陽元表》375頁)中周倉卻見於中界，云：“請關平和關索執刀周呂”。

4

八郎官 看不清 天空景①致
望遠見 靈霄②殿 霞光紛紛③
東廊④下 懸⑤的是 龍鳳花鼓⑥
西廊下 景陽鐘⑦ 響亮⑧叮聲
正殿上 坐⑨的是 玉皇大帝
左金童 右玉女 兩邊排分
符使⑩官 到殿前 雙膝跪下
將公文 頭上頂 獻與玉尊
左金童 右玉女 將疏來接
玉帝主 攤虎指 拆⑪開公文
玉帝主 看罷⑫疏 御⑬心大喜
張虎口⑭ 露虎牙 便問符神

①原寫作“京”，以意改。下同。

②原寫作“肖”，今正。

③原寫作“分分”，以意改。

④原寫作“郎”，同音而誤，今正。下同。

⑤原寫作“玄”，同音而誤，今正。

⑥猶云畫鼓。通州《天仙表》(370頁)云：“東廊上有一面龍鳳畫鼓”。

⑦原寫作“叮”，疑“亮”之誤。

⑧原寫作“井楊鐘”，今正。“景陽鐘”，南朝齊武帝下令置鐘於景陽樓上。後稱之為“景陽鐘”。通州《天仙表》(370頁)云：“西廊下景陽鐘鐘響連聲”。

⑨原寫作“座”，今正。

⑩原寫作“士”，同音而誤，今正。下同。

⑪原寫作“折”，形近而誤，今正。

⑫原寫作“把”，同音而誤，今正。

⑬原寫作“與”，同音而誤，今正。通州《天仙表》(370頁)云：“金闕住一見表御心大喜”。

⑭“虎”字，似有誤。通州《天仙表》(370頁)云：“(玉皇大帝)開御口露玉齒使問符神”。通州《陽元表》(374頁)云：“(東嶽王)開虎口露虎牙叫聲九郎”。

5

這一支 公文疏 哪①家來的
符使官 你來請 奏上莊村②
八郎官 在下邊 不敢仰視

稱一聲	玉帝主	聽奏地名
住中華	江蘇省	如皋市
		<或>南通市管
		如東縣
寶莊③上	做勝會	來請玉尊
我乃④是	會首家	差⑤吾來的
請吾王	鑾駕⑥到	設收香燈⑦
玉帝主	聽得說	虎心大喜
叫金童	和玉女	發⑧道回文
上一聯⑨	保會首	物華天寶⑩
下一聯	寫的是⑪	人傑地靈

- ①原寫作“那”，同音而誤，今正。
- ②“莊村”，意未解，疑“玉尊”之誤。
- ③“寶莊”，本莊也。後文云：“本莊上，做勝會”。
- ④原寫作“扔”，以意改。
- ⑤原寫作“在”，音近而誤，今正。
- ⑥原寫作“加”，以意正。
- ⑦原寫作“登”，“登”疑“燈”之誤，今正。
- ⑧原寫作“發”，疑“發”之俗字，今正。下同。
- ⑨“連”疑“聯”之誤，今正。下同。
- ⑩“物華天寶”喻為珍奇寶貴之物。
- ⑪原寫作“事”，“事”之俗字，同音而誤，今正。

6

.....

我這裡①	發回文	交代與你
至②本壇	掛個號	代傳回成③
符使官	聽得說	多謝玉帝
蒙吾王	準成疏	走出廟門
請東方	甲乙木	四元丹相④
請南方	丙丁火⑤	六元辛君⑥
請西方	庚辛金	五日生送福⑦
請北方	壬癸水	解厄長生⑧
請中央	戊己土	九曜大帝⑨
注福星	注祿星⑩	十二宮辰
八郎官	到本莊	下馬又請
請本方	張土地	扒蚌將軍⑪

- ①原寫作“禮”，同音而誤，今正。
- ②原寫作“志”，當作“至”。“到”字亦可。通州《天仙表》云：“魏九郎到本壇公文交下”。
- ③“成”疑“程”之誤。
- ④指東斗四元星四元宰相。通州《天仙表》云：“請東斗四元星四元宰相”。
- ⑤丙丁火，《江蘇省通州市橫港巷北店村胡氏上童子儀式》(113頁)云：“這是通過灶王爺向南方火德星君借來的「丙丁火」，是神火、天火、三昧真火。”
- ⑥指南斗六元星。通州《天仙表》云：“請南斗六元星添延壽福”。
- ⑦指西斗五元星。通州《天仙表》云：“請西斗五元星五福臨門”。
- ⑧指北斗七元星。通州《天仙表》云：“請北斗七元星保住長生”。解厄，解除災厄也。道家以三官大帝，下水官主解厄。參看《道教大辭典》(566頁)。
- ⑨原寫“九要大帝”，音近而誤，今正。通州《天仙表》云：“請中央九曜星九宮八卦”。
- ⑩指注祿星君。
- ⑪“蚩蚩”，猶云“蚩蝟”，蝗蟲。通州《十炷香開壇詞》(320頁)云：“請土地地方上上登五穀，穀滿登登寶座座安鎮康。請蚩蝟蚩蝟神神蟲之星，蝗蟲吃吃飛飛過長江”。“蚩蚩將軍”，通州《天仙表》(371頁)中只見張土地，此人未見，然而通州童子的神壇上有“螟蛉蝻蝗草蟲飛蛾蚩蝟之神”的神牌(參看《江蘇省通州市橫港巷北店村胡氏上童子儀式》66頁)，應是掌管“蚩蝟”之神。南通《江蘇南通童子祭祀儀式劇本·13 請星迷路》云：“又請本方張土地，蚩蝟老爺卜咀兒尖，請問老爺為甚的，不得好酒好香煙，叫老老爺莫發怒，我叫香主包喜錢，有了錢來有得用，隨你上街坐酒店，蚩蝟老爺心歡喜，把些蟲兒趕上天”。 7

.....

請家堂	供香火	三十六位
東廚內	司命府	九齡灶君①
言不盡	天仙疏	獵壇幾句②
在壇前	高供奉	酒滿初斟③
當壇交代神神去		回來押在花盤心
你我對面行個禮		做會之後發萬金

<中界表>

交過天仙疏一張	二封表張請齊④王
壇前油封中界表	煩請符官上天堂
符官聽說師人話	連忙接屬換絨裝
手拿鎖子開箱子	取出頭盔共絨裝
頭戴三尖鑽天帽	大紅禪巾分兩旁⑤
腰繫干紅一丈二	粉底烏靴造絨傍

- ①猶云九靈灶君。《天仙表》(371頁)云：“請東廚司命府九齡灶君”。
- ②“獵”字，待考。按通州《天仙表》(371頁)，後文云：“天仙疏，當壇交代”，《天仙表》云：“意欲要留符官細談幾句，又怕的譙樓上鼓打初更”，此段似有誤。
- ②“珍”疑“斟”之誤。如皋《羅通掃北》云：“酒滿斟 送神將”。
- ③原寫作“其”，通州《陽元表》云：“當中央坐的是天齊東嶽”，又云：“九郎官到丹墀一步一拜，公文帖頭上頂表獻齊王”，疑“其”字同音而誤，今正。下同。
- ④原寫作“傍”，以意改。
- ⑤原寫作“計”，同音而誤，今正。

8

收拾①打扮方才了 後槽牽出馬繫韁
 龍馬牽到壇台下 刨刨刷刷請齊王
 龍馬當壇喂個飽 羅木鞍轡背身上
 符官上馬就要走 巫人踩②住馬繫韁
 九郎問道留什的 未成囑表請齊王
 中界九郎 跳下繫韁③ 重用走 慢點忙
 玉人④囑表請齊王 與你一匹黃彪馬⑤
 黃馬黃鞍黃達登 項下鈴兒響叮噹
 屁股闌⑥的銀班首 扒心肚帶黃雙雙
 此馬不比凡間馬 也能三界請神將
 只因⑦壇前無好馬 擇封黃馬請齊王
 黃彪馬 對上陽元表兩張

- ①原寫作“什”，同音而誤，今正。
- ②原寫作“採”，今正。
- ③原寫作“江”，同音而誤，今正。
- ④“玉人”，疑“巫人”之誤。
- ⑤“黃彪馬”猶云“黃驃馬”。《西遊記》38回云：“坐下黃驃馬，腰帶滿弦弓”。
- ⑥“闌”，疑“用”之誤。上文云：“屁股用的銀班首”。
- ⑦原寫作“陰”，同音而誤，今正。

9

住一住 停一停 吟詩一首請齊王
 三點工①成江 韓信問張良
 霸王歸何處 自刎②在烏江
 符官吟馬詩一首 串成十字請齊王
 第二封陽元表當壇交代 小法司請囑咐去請齊王

千叮嚀	萬囑咐	路存仔細
防風雨	休洩濕③	公文表章
符使官	聽得說	雙手來接
接公文	跨上馬	駕④起雲光
雲裡走	霧裡行	來得好快
遠望見	東峰殿	大放豪光
紅的紅	綠⑤的綠	桃紅柳綠

①原寫作“公”，同音而誤，今正。

②“免”當為“勿”之誤。《謝土封神》(295頁)云：“三工合為江，韓信問張良。霸王今何在，自勿在烏江”。

③原寫作“混”，形近而誤，今正。

④原寫作“加”，今正。

⑤原寫作“泉”，今正。下同。

10

.....

桃園①裡	枇杷②樹	有甜有涼
符使官	看不盡	廟外景致③
爵幹④下	門繩扣	走進廟堂
東廊下	龍鳳鼓	響聲不斷⑤
西廊下	景陽鐘	不住⑥亂撞⑦
正殿上	坐⑧的是	東嶽大帝
兩旁邊	排立的	張康丞⑨相
符使⑩官	到殿前	雙膝跪下
將表章	頭上頂	獻在案⑪上
張丞⑫相	在旁邊	將表接上
仁元主	攤虎指	拆⑬開表章
天齊王	看表章	虎心大喜

①疑當作“果園”。通州《陽元表》(373頁)云：“紅的紅綠的綠桃紅，果園內枇杷樹鮮甜待涼”。

②原寫作“桃把”，不可解。按通州《陽元表》(373頁)云：“果園內枇杷樹鮮甜待涼。櫻桃樹通天涼再生櫻桃”，通州《天仙表》(370頁)云：“桃園內枇杷樹枝葉真真”，今正。

③原寫作“京致”，同音而誤，今正。通州《九支表文·9 三官表》(387頁)云：“符使官看不盡路上景致，把龍馬加鞭打祇往前鑽”。

④“爵幹”，待考。金湖《三界表·中界表》(74頁)云：“一駕雲二駕霧來得其快，遠望見東嶽殿霧氣吞吞，九郎官到門前滾鞍下馬，梧桐樹歇下馬扣住韁繩”。

- ⑤寫作“段”，同音而誤，今正。
 ⑥原寫作“助”，同音而誤，今正。
 ⑦原寫作“狀”，同音而誤，今正。
 ⑧原寫作“座”，今正。
 ⑨原寫作“呈”，同音而誤，今正。下同。
 ⑩原寫作“是”，同音而誤，今正。
 ⑪原寫作“接”，同音而誤，今正。
 ⑫原寫作“臣”，同音而誤，今正。
 ⑬原寫作“折”，以意正。

11

張虎口 露虎牙 便問九郎
 這一支 公文表 哪①家來的
 符使官 你來請 這上村莊
 九郎官 在下邊 三等叩首②
 稱一聲 天齊王 聽這會堂
 江蘇省 直隸州③ 如皋西北
 本莊上 做勝會 來請齊王
 天齊王 聽得說 虎心大喜
 叫張康 和丞相 取出文房④
 上一聯 保會首 人口太平
 下一聯 右⑤保他 六畜興旺
 我這裡 發回文 交代與你

- ①原寫作“那”，今正。
 ②原寫作“扣手”，同音而誤，今正。
 ③原寫作“洲”，今正。
 ④原寫作“方”，今正。
 ⑤疑當作“又”或“佑”。

12

至本壇 掛個號 再下天堂
 符使官 聽得說 拜別東嶽
 蒙吾王 準成表 代傳會上
 請東嶽 和西嶽 南嶽北嶽
 丙丁宮 大太子 王母娘娘
 請家堂 供香火 三十六位
 東廚內 司命府 九齡灶王

符使官 到本莊 下馬又請
請本方 張土地 𧈧𧈧大王
言不盡陽元表獵壇幾句 在壇前高供奉酒滿二上
當壇交代神神去 回來押在花盤上
你我對面打一躬① 做會之後大興旺

①原寫作“弓”，今正。

13

中界表結束①

交過上中表二臺 三封表帖請下界
水仙五②郎小卿在 收拾打扮去朝拜
符官聽說司人話 連忙接屬③換盔甲
手拿鎖子開箱子 取出頭盔鐵甲開
頭戴三尖鋼帽④ 大紅絨求面門⑤篩
腰繫⑥干紅一丈二 粉底烏靴靠了埃
打扮⑦一場⑧方才了 後曹牽出黑馬來
龍馬牽到壇臺下 抱抱刷刷請幽⑨界
龍馬當壇喂個飽 羅木鞍喬不茄盃⑩
符官上馬就要走 法司踩住⑪馬回來
符官問道留甚的 未成囑表請幽界

①原寫作“速”，今正。

②原寫作“伍”，今正。

③“屬”疑“束”之誤。

④此句疑有脫字。

⑤原寫作“門”，今正。

⑥原寫作“細”，同音而誤，今正。

⑦原寫作“粉”，今正。

⑧原寫作“一長”，疑當作“一場”。

⑨原寫作“𧈧”，“幽”之俗字。

⑩此句疑有誤。

⑪原寫作“採助”，同音而誤，今正。

14

下界五郎跳下馬來 重用走 慢亥①行
巫人囑表請幽界 收拾行埃②離③壇去

有封表帖請幽界		封你一匹烏駒④馬
烏馬烏鞍烏達登		項下烏鈴掛起來
戒陀⑤當年薛仁貴		也能保主過東海⑥
只因壇前無好馬		勅封烏馬請下界
烏駒馬		對上總共⑦鐵三⑧臺
重用走 慢亥亥		吟詩一⑨首請幽界
小到⑩下山來		黃花變其⑪開
一聲雷鼓響		也⑫出衆⑬仙來
烏龍馬	第三排	串成十字請下界
第三封	幽冥帖	當壇交代

①“亥”疑“刻”之誤，抄工誤脫右半。如皋方言“刻”指“一會兒”、“片刻”。

②“埃”疑亦有誤。

③原寫作“難”，形近而誤，今正。

④“烏駒”，疑“烏騅”之誤。烏騅，駿馬名，本是項羽之坐騎也。

⑤二字疑有誤。或疑當作“延陀”。

⑥指唐代英雄薛仁貴瞞天過海的故事。

⑦“公”疑“共”之誤。

⑧“鐵”字，待考。

⑨原寫作“乙”，同音而誤，今正。

⑩“到”疑“道”之誤。

⑪“變其”疑“遍地”之誤，音同。

⑫疑有誤。

⑬原寫作“安”，形近而誤，今正。

15

小法司	請囑咐	去請幽界
符使官	聽得說	雙手來接
接公文	跨上馬	只①奔幽界
伍郎官	在馬上	抬②頭觀看
前來到	陰世裡③	黑氣亂節
望上瞞	瞞不見	日月星斗
望下看	看不見	地土塵④埃
望前看	看不見	前面路引
望後瞞	瞞不見	行人往來
符使官	在馬上	陡生一計
夜明珠⑤	托在手	亮光放開

走金山 過銀山⑥ 穿⑦直進⑧過

①“只”疑“直”之誤。

②原寫作“台”，今正。

③原寫作“禮”，同音而誤，今正。

④原寫作“呈”，同音而誤，今正。

⑤傳說中夜間能發光的寶珠。通州《九支表文·7 幽冥表》(以下簡稱《幽冥表》，378 頁)云：“符使官在馬上陡生一計，夜明珠托在手豪光分清”。

⑥通州諸本中均不見“金山”、“銀山”，南通《魏五郎遊十八關》(202 頁)云：“地府裡十八關關遞表，見座關見座關連投公文，走金山過銀山腳下好走，前來到破錢山第一座關門”。

⑦原寫作“川”，同音而誤，今正。通州《陽元請神》(350 頁)云：“吳家莊上穿直過”。

⑧“進”疑當作“經”或“逕”。通州《陽元請神》(349 頁)云：“老虎莊上穿經過”。 16

前來到 破錢山① 掙掙②開開
走金橋 過銀橋 平平穩穩③
前來到 奈何④橋 跳下馬來
一隻⑤手 拿的是 公文表帖
一隻手 拉烏馬 站過橋外⑥
將軍樹⑦ 綁⑧的是 大斗小秤⑨
油鍋裡⑩ 將人煮 亂國姦⑪歪
磨子內⑫ 磨的是 強⑬嘴媳婦
鋸櫚⑭裡 只是松⑮ 五倫之外
寒冰獄 坐的是 原⑯流浪子
前來到 惡犬莊⑰ 犬子厲⑱害
割舌玩⑲ 割的是 說謊刁剝⑳

①“破錢”，破損不完整的錢幣。通州《幽冥表》(378 頁)云：“破錢山為祇為女人化紙，到陰世用不掉堆成山林”。

②原寫作“掙掙”，待考。

③原寫作“汶汶”，今正。通州《幽冥表抄本》(434 頁)云：“前到了奈河橋第四關門，走金橋過銀橋平平穩穩”。

④原寫作“河”，今正。

⑤原寫作“執”，同音而誤，今正。下同。

⑥“奈何橋”，通州《幽冥表抄本》(434 頁)云：“鬼使橋奈河橋實在難行，奈河橋萬丈高欄杆沒得，問此橋有多寬一寸三分，行善的橋上走蓮花托住，行惡的走橋上打下水心，有蛇龍併虎豹將人來咬，有鷓子喳喳叫要啄眼睛，符使官在馬上陡生一計，執公文跳下馬走過橋林”。

“站”字似寫作“走”。

⑦“將軍樹”，應寫作“將軍柱”。通州《幽冥表》(381頁)云：“前來到割舌關十座關門，……(中略)……，綁上了將軍柱小繩鎖起，有小鬼拿鋼刀割去舌根”。通州《幽冥表抄本》(440頁)云：“將軍柱擲的是大斗小秤”。

⑧原寫作“榜”，今正。

⑨“大斗小秤”，偷斤減兩，占人便宜意。通州《幽冥表抄本》(440頁)云：“第七等作惡人大斗小秤，打板子枷陰枷亂箭川心”。

⑩指十惡關之一。按通州《幽冥表》(383頁)云：“前來到十惡關十七座關門，……(中略)……，油鍋裡煎的是奸臣作亂”。

⑪原寫作“𦉳”，同音而誤，今正。

⑫指十惡關之一。按通州《九支表文·7 幽冥表》(383頁)云：“前來到十惡關十七座關門，……(中略)……，磨子上磨的是二婚媒人”。

⑬“強”疑“犖”之誤。

⑭此字義未詳，待考。通州《幽冥表》(382頁)云：“前來到十惡關十七座關門，……(中略)……，鋸子上鋸的是一女二夫，丟前夫嫁後夫兩個男人”。通州《幽冥表抄本》(440頁)云：“鋸子山鋸的是吃齋開葷”。

⑮“松”疑“送”之誤。

⑯原寫作“沅”，今正。下同。

⑰“惡犬莊”，猶云“惡狗巷”。通州《幽冥表》(380頁)云：“前來到惡犬巷六座關門，花狗子黑狗子數十多隻，獅子狗青悍狗毛像鋼針，獅子狗張開口血盆能大，呲牙齒往上趕亂搶人吞，在陽間牽獵狗來挖墳墓，眾狗子趕上去咬他腳跟”。通州《幽冥表抄本》(432頁)云：“前來到惡犬村第二關門，惡犬村有犬子驢子能大，眼如鈴齒如劍就要吞人”。

⑱原寫作“利”，今正。下同。

⑲“坑”字符，疑“關”或“坑”之誤。通州《幽冥表》(380頁)云：“前來到割舌關十座關門，割舌關眾鬼魂無千無萬”。

⑳猶云刁潑。通州《幽冥表抄本》(438頁)云：“前到了割舌山第十五層，割舌山有罪人千千萬萬，都是些陽世間說謊些人，說人家販是非偷漢做賊，勸人家打官事他做見證”。 17

.....
放火坑① 放的是 放火賴債
王婆店② 賣的是 暈迷③湯粥
遠望見 尖刀山④ 十分厲害
行善人 撻上去 蓮花托住⑤
做惡人 望下攢 刀割⑥分開
望鄉臺⑦ 有鬼使⑧ 自心望月⑨
血汾⑩池 坐的是 生產群才⑪
紅湯湯 紫溜溜⑫ 兩池血水

叫婦 ^⑬ 人	吃下去	放你投胎 ^⑭
不吃他	這血水	鬼使要打
倘若還	吃血水	污味難呆
只說到	在陽間	生兒育 ^⑮ 女

①“放火坑”，通州《幽冥表》(380頁)云：“前來到放火坑九座關門，放火坑眾鬼魂無其無數，都是些在陽間作孽火焚。到東家跑西家撈飢借不到，黑夜裡去放火燒人家門，在陽間放了火罪過不少，到陰間放火坑難得過身”。

②“王婆”，猶云孟婆，神話傳說中的女神。通州《幽冥表》(380頁)云：“前來到王婆店三座關門，王婆賣的是昏迷藥酒，叫人吃下肚放他行程，吃藥酒忘記了陽間之事，昏了頭忘記了前世事情，少吃點投胎去聰明伶俐，多吃了到陽間懵懂實心”。

③指迷魂湯。猶云馬虎湯。原寫作“米”字，今正。

④“尖刀山”，通州《幽冥表抄本》(439頁)云：“前到了尖刀山第十八層，尖刀山有罪人千千萬萬，都是些陽世間行惡之人，千張刀朝上長快如風大，萬張刀朝上長亮亮睜睜，行善的上刀山蓮花托住，行惡的上刀山刀割川心”。

⑤原寫作“助”，同音而誤，今正。

⑥“葛”疑“割”之誤，今正。

⑦原寫作“汪”，同音而誤，今正。“望鄉臺”，通州《幽冥表》(379頁)云：“前來到望鄉臺四座關門，眾鬼魂上仙臺朝家一望，望家中兒和女朝拜亡靈，有親戚和鄰友個個弔孝，亡靈魂望家中眼淚紛紛，亡靈前供的是真香百味，眾鬼魂吃不到實在傷心”。

⑧原寫作“伎”，今正。後文云：“鬼使要打”。

⑨此句疑有誤，待考。

⑩“血汾池”，似應作“血盆池”或“血湖池”。通州《幽冥表》(381頁)云：“前來到血湖池十五座關門，血湖池眾女人點數不盡，都是的在陽間生育子孫，眾女人在陽間生男育女，把血水滿地滑污穢神明，祇等她陽壽絕命歸地府，到陰間坐血湖吃苦傷心”。

⑪“群才”，待考。通州《幽冥表抄本》(438頁)云：“多是些陽世間生產婦人”，

⑫原寫作“留留”，今正。《幽冥表抄本》(438頁)、南通《魏五郎遊十八關》(206頁)都寫作“紫滴滴”。

⑬原寫作“夫”，同音而誤，今正。

⑭原寫作“頭代”，同音而誤，今正。

⑮原寫作“玉”，同音而誤，今正。

18

.....

將血水	滿地倒 ^①	造下罪來
早知道 ^②	血汾池	這樣苦處 ^③
在陽間	血盆經 ^④	早早還開
叫一聲	大兒子	二乖乖小伙

你在那塊⑤	果知道	你親娘母
實⑥在難挨		
地中府	十八關	城城⑦難過
遠望見	森羅殿	五福樓臺
正殿上	坐的是	幽冥教主
兩旁邊	排立的	目蓮⑧五戒⑨
五郎官	到殿前	頂禮參⑩拜
將公文	頭上頂	獻上神臺

①原寫作“到”，今正。

②原寫作“之到”，同音而誤，今正。

③原寫作“助”，同音而誤，今正。

④“血盆經”，全名為“目蓮正教血盆經”。為婦女難產或罹患婦女病時念誦祈禱的經文。舊時民間流傳甚廣，但不載於大藏經，應屬偽作。或稱為“女人血盆經”。通州《幽冥表》（382頁）云：“還朝官破血湖超度上人，有一種血盆經五千另四十八卷，請僧道來唸出超度女人”。

④原寫作“快”，同音而誤，今正。

⑤原寫作“十”，同音而誤，今正。

⑥“城城”疑“層層”之誤。

⑦釋迦牟尼佛的弟子。猶云目連、目犍連。在佛教雕像中，常侍立在釋尊左邊。

⑧原寫作“吾界”，有誤，今正。通州《幽冥表》（383頁）云：“地藏王駕座在攝魂亭上，……（中略）……左牛頭右馬面十般十司，有目連和五戒惡鬼兇神”。

⑨原寫作“摻”，以義正。

19

.....

左目蓮	右五戒①	將帖接上
地藏王	攤虎指	把帖拆開
地藏王	看罷②帖	佛心大喜
張佛口	露佛齒	便問卿在③
這一支	公文帖	哪④家來的
五郎官	你來請	這上地界⑤
符使官	在下邊	連忙啟奏
稱一聲	地藏王	聽這地界
江蘇省	直隸州	如皋東南
寶莊上	做勝會	來請幽界
我乃是	會首家	差⑥我來的
請吾王	鑾駕⑦到	設收錢財⑧

①原寫作“武界”，今正。

②原寫作“把”，同音而誤，今正。

③待考。“卿在”疑“鄉莊”或“欽差”之誤。

④原寫作“那”，今正。

⑤此句似有脫誤。通州《陽元表》(374 頁)云：“東嶽王見表章虎心大喜，開虎口露虎牙叫聲九郎。這封表這支帖何處來的，為哪塊因何事表到大邦。有鄉貫並地界快奏明白”。

⑥原寫作“在”，同音而誤，今正。

⑦原寫作“加”，同音而誤，今正。

⑧原寫作“才”，同音而誤，今正。

20

.....

地藏王	聽得奏	佛心大喜
叫目蓮	和五戒	用①筆目②來
上一聯	保會首	壽比南山
下一聯	保會首	福如東海
我這裡	發一道	公文表帖
至本壇	掛個號	再去朝拜
符使官	聽得說	多謝佛王
蒙吾主	準成帖	代傳陽界
請家堂	供香火	三十六位
東廚裡	司命府	龍虎招財③
符使官	到本莊	下馬又請
請本坊	張土地	𧈧𧈧老爺

①原寫作“甩”，同音而誤，今正。

②“目”字，疑有誤。待考。

③原寫作“才”，以意改。

21

.....

言不盡	下界表	獵壇幾句
在壇前	高供奉	酒滿三節
當壇交代神神去		回來才望中盤擺
你我對面拜一拜		做會之後大發財①
高叫符官慢點走		與你金錢隨②身帶
路上遇③到鮮茶館		買點鮮茶忍心懷④
下次哪處做勝會		再把你符官請得來
符官聽說多滿意		手牽絲韁出壇外
三界符官速⑤行上馬		去了去了 酒滿三張⑥

三封表張一齊交帶

做會之後 家家發財 萬事滿意

①原寫作“才”，今正。

②原寫作“誰”，同音而誤，今正。

③原寫作“與”，同音而誤，今正。

④此句疑有誤。

⑤原寫作“縮”，以義正。

⑥“張”疑“斟”或“盅”之誤。通州《天仙表》(372 頁)云：“兩杯三盅打馬走，不能耽擱回堂門”。

22

.....

【參考文獻】

- 李叔還編《道教大辭典》(浙江古籍出版社，1987)
- 金文京他共著《花關索傳之研究》(汲古書院，1989)
- 曹琳著《江蘇省通州市橫港鄉北店村胡氏上童子儀式》(財團法人施合鄭民俗文化基金會，1995，民俗曲芸叢書)所收《謝土封神》、《九支表文》、《幽冥表抄本複印件》
- 曹琳著《江蘇省南通市閘東鄉公園村漢人的免災勝會》(財團法人施合鄭民俗文化基金會，1996，民俗曲芸叢書)所收《天仙表》
- 曹琳校注《江蘇南通童子祭祀儀式劇本》(財團法人施合鄭民俗文化基金會，2000，民俗曲藝叢書)所收《魏九郎替父請神》、《九郎借馬鬧東海》、《魏五郎遊十八關》、《請星迷路》
- 姜燕編著《香火戲考》(廣陵書社，2007)所收《三界表》

三界表金奉三个十字

夏烟银抄

画字以畢
三界符宮
馬駕祥雲
金碧銀安灯
茶酒初盤送公文
壇前內有三封表
會首画字甚先成
會首批笔画下字
封被封遠際
衣上甲起三竹卯
兩奈金虎左右

上界天仙八部官 斗牛宮帝請玉尊
 手拿鎖子開箱子 取出頭盔共衣冠
 頭代三共專天帽 大紅一朵面門眉
 腰計千紅一丈二 蹬雲靴子足下登
 杖計打办方才了 後曾千山馬能行
 龍馬仵到壇台下 抱之刷之請玉尊
 龍馬當壇喂了宝 羅木按橋分上身
 符官上馬就要走 法司採住馬繮繩
 符官問到留甚記 未成祝表請玉尊
 上界八部 跳下能行 重用走 慢点行
 巫人囑咐你動身 馬你一匹白龙
 白馬白撮白達登 項下鈴光响叮声

屁古用的銀班首 心肚代白如銀
 此馬不比凡間馬 也能三界去請神
 曾說当年小唐僧 去到西天取增經
 取經增經回東土 偈与世界萬之增
 只因壇前无好馬 当壇勅賜八郎神
 白龙馬 對上天仙疏一分
 住一住 停一停 吟濟一首請玉尊
 二木擘為林 关素向关屏
 老舍归何处 騎馬过松林
 符官吟把誦一首 信成十字請玉尊
 第一封 天仙疏 当壇受
 小座人 請囑咐 去請玉尊

當本進 都土地 神門法司
小巫人 奏文疏 交代符神
內公文 外封套 封套上印
一字之 一行之 喜德分清
仵叮守 萬囑咐 路存仔細
防風雨 休洒濕 表疏公文
符使官 听遠說 連声小德
接公文 跨上馬 騰霧祥雲
雲礼走 霧礼行 來德好快
遠望見 南天門 大放光明
前來到 南天門 止細干看
有周倉 執大刀 把守天門

八郎官 看不清 天空京致
遠望見 靈肖殿 霞光分主
東郎下 玄的是 龍鳳花鼓
西郎下 井楊鍾 响晾叮声
正殿上 座的是 玉皇大帝
左金童 右玉女 兩邊排分
符士官 到殿前 双膝跪下
將公文 頭上頂 獻与玉尊
左金童 右玉女 將疏来接
玉帝主 攤虎指 折开公文
玉帝主 看把疏 与心大喜
張虎口 露虎牙 便向符神

下一連	上一連	叫金童	玉帝主	請吾王	我仍是	寶庄上	住中華	祿一聲	八郎官	符士官	這一支
写的	保會首	和玉女	听遠說	奎加到	會首象	做勝會	江蘇省	玉帝主	在下邊	你來請	公文疏
的人	物華天寶	凌道回文	康心大喜	設叔香登	在吾來的	來請玉尊	<small>如南</small> 管	听奏地名	不敢仰視	奏上庄村	那家來的
							<small>如東</small> 市				

請本亦	八郎官	注福星	請中央	請北方	請西方	請南方	請東方	蒙吾王	符使官	志本壇	我這札
張土地	到本庄	注录星	戌巳土	壬癸水	庚辛金	丙丁火	甲乙木	準成疏	听遠說	掛了号	凌回文
蚩蚩將軍	下馬又請	十二宮辰	九要大帝	解厄長生	五日生送福	六元辛君	四元丹相	走出廟門	多謝玉帝	代傳回成	交代与你

請家堂 供香火 三十六位
 東厨内 司命府 九齡灶君
 言不尽 天仙疏 獵壇九句
 在壇前 高供奉 酒滿初珍
 當壇交代神去 回來押在夜盤心
 你對我面行了禮 做會之後發萬金
 交過天中界表仙疏一張 二封表張請其王
 壇前有封中界表 願請符官上天堂
 符官所說師人話 連忙接屬換絨裝
 手拿鎖子鬧猫子 取頭盔共絨裝
 頭代三尖專天帽 大紅禪巾分兩傍
 腰計千紅一文二 粉底烏靴造絨傍

收什打办方才了 後曹什出馬系疆
 龍馬什到壇台下 抱之刷之請其王
 龍馬當壇喂个飽 羅木撥橋背身上
 符官上馬就要走 巫人採住馬系疆
 九郎问到為什的 未成囑表請其王
 中界九郎 跳下系江 重用走 慢点忙
 玉人囑表請其王 与你一匹黃鹿馬
 黃馬黃撥達登黃 項下鈴光响叮噹
 屁股南的銀班首 心肚代黃双之
 此馬不比凡間馬 也能三界請神將
 只阴壇前无好馬 捧封黃馬請其王
 黃鹿馬 對上陽元表兩張

住一住 停一停 吟詩一首請其王

三點公成江 韓信問張良

霸王歸何處 自免在烏江

符官吟馬詩一首 傳成十字請其王

第二封陽九表當壇交代小法司請囑咐去請其

千叮囑 萬囑咐 路存仔細

防風雨 休洒混 公文表章

符士官 听法說 双手来接

接公文 跨上馬 加起雲光

雲禮走 霧裏行 來得好快

遠望見 東峰展 大放豪光

紅的紅 录的录 桃紅柳录

桃園裏 桃把樹 有田有粮

符使官 看不尽 廟外京鼓

爵干下 白繩扣 走進廟堂

東郎下 龍鳳鼓 响声不殺

西郎下 井楊鍾 不恥亂杖

正殿上 座的 是東嶽大帝

兩榜邊 排立的 張康呈相

符是官 到展前 双膝跪下

將表章 頭上頂 獻在樓上

張臣相 在傍邊 將表接上

仁元主 攤虎指 折開表章

天其王 看表章 虎心大喜

張虎口露犀牙便問九郎
這一支公文表那家來的
符士官你來請這上村庄
九郎官在下邊三弄扣手
稱一聲天其王听這會堂
江蘇省直隸州如皋西北
本庄上做勝會來請其王
天其王听得說虎心大喜
叫張康和臣相取出文方
上一連保會首人口太平
下一連右保他六畜兴旺
我這裏發回文交代与你

志本壇掛了号再下天堂
符士官听得說拜別東嶽
蒙吾王準成表代傳會上
請東嶽和西嶽南嶽北嶽
丙丁宮大太子王母娘之
請象堂供香火三十六位
東厨内司命府九齡灶王
符士官到本庄下馬又請
請本方張土地蜈蚣大王
言不尽陽元表魏壇凡句在壇前高供奉酒福上
當壇交代神神去回來押在花籃上
你我對面打一弓做會之後大兴旺

中界表速

交过上中表二台 三封表帖請下界
 水仙位郎小卿在 叔什打扮去朝拜
 符官听说司人話 連忙接属換盛甲
 手拿鎖子開箱子 取出頭盛鉄甲開
 須代三尖鋼帽 大紅絨求面們篩
 腰細干紅一丈二 粉底烏靴靠了埃
 打粉一長方才了 後膏什出黑馬來
 龍馬仵到壇台下 抱之刷之請出界
 龍馬當壇喂了飽 羅木櫻芥不茹盃
 符官上馬就要走 法司採取馬回來
 符官回到苗基的 未成囑表請出界

下界五郎跳下馬來 重用走 慢亥行

巫人囑表請出界 叔什行埃壇去

有封表帖請出界 封你一匹烏駒馬

烏馬烏櫻烏連登 項下烏鈴掛起來

戒院当年薛仁貴 也能保主过東海

只因壇前无好馬 勅封烏馬請下界

烏駒馬 對上總公鉄三台

重用走 慢亥之 吟詩乙首請出界

小到下山來 黃花瘦其開

一声雷鼓响 也出出仙來

烏尤馬 第三排 俱成十字請下界

第三封 九山冥帖 當壇交代

當壇交代

走金山	夜明珠	符使官	望後	望前	望下	望上	前來到	伍部官	接公文	符使官	小法司
過銀山	托在手	在馬上	瞞不見	看不見	看不見	瞞不見	陰世禮	在馬上	跨上馬	听虛說	請囑咐
川直進	亮光放	陡生一計	行人往來	前面路引	地土呈埃	日月星斗	黑氣亂篩	台頭觀看	只奔出界	雙手來接	去請出界

割舌坑	前來到	寒冰獄	鋸樞禮	碾子內	油鍋禮	將軍樹	一執手	一執手	前來到	走金橋	前來到
割的是	惡犬庄	座的	只是松	碾的是	將人煮	榜的是	拉烏馬	拿的是	奈河橋	過銀橋	破錢山
說謊刀	犬子利害	尻流浪子	五倫之外	強嘴媳婦	亂國奸歪	大斗小秤	站過橋外	公文表帖	跳下馬來	平之沒之	搶之用之

只說到	倘若還	不吃他	叫夫人	紅湯之	血汾池	汪鄉台	作惡人	行善人	遠望見	王婆店	放火坑
在陽間	吃血水	這血水	吃下去	紫留之	座的是	有鬼伎	望下攢	揭上去	尖刀山	賣的是	放的是
生兒玉女	汚味難呆	鬼使要打	放你頭代	兩池血水	生產犀才	自心望月	刀萬分開	蓮花托助	十分利害	暈米渴粥	放火賴債

將公文	五郎官	兩傍邊	正殿上	遠望見	地府中	十在難挨	你在那	叫一聲	在陽間	早之到	將血水
頭上頂	到屏前	排立的	座的是	森羅殿	午八關	你在難挨	快果知	大兔子	血盆經	血汾池	滿地到
献上神台	頂礼摻拜	自蓮吾界	是 出冥教主	五福樓台	城之就過	你在難挨	道 你亲娘母	二亦小使	早之还開	這樣苦勸	造下罪來

請	我	聖	江	稱	符	五	這	張	地	地	左
吾	乃	座	蘇	一	使	拜	一	佛	藏	藏	目
王	是	上	省	聲	官	官	支	口	王	王	蓮
臺	會	做	直	地	在	你	公	露	看	攤	右
加	首	勝	隸	藏	下	來	文	佛	把	虎	武
到	象	會	洲	王	邊	請	帖	齒	帖	指	界
設	在	來	如	聽	連	這	那	使	佛	把	將
以	我	請	舉	這	忙	上	象	向	心	帖	帖
錢	來	出	東	地	啟	地	來	鄉	大	拆	接
才	的	界	南	界	奏	界	的	在	喜	開	上

請	符	東	請	蒙	符	志	我	下	上	叫	地
本	使	廟	象	吾	使	本	這	一	一	目	藏
坊	官	禮	堂	王	官	壇	禮	連	連	蓮	王
張	到	司	供	準	聽	掛	發	保	保	和	聽
土	本	命	香	成	得	了	一	會	會	五	得
地	庄	府	火	帖	說	号	道	者	者	戒	奏
蚩	下	尤	三	代	多	再	公	福	壽	用	佛
蚩	馬	虎	十	傳	謝	去	文	如	比	筆	心
老	又	招	六	阳	佛	朝	表	東	南	目	大
爺	請	才	位	界	主	拜	帖	海	山	來	喜

言不尽 下界表 獵壇几句

在壇前 高供奉 酒滿三盤

當壇交代 神神去 回來才望中盤擺

你我对面拜一拜 做會之後太發才

高叫符官慢点走 与你金錢誰身代

路上与到鮮茶館 買点鮮葱忍心怀

下次那处做勝會 再把你符官請得來

符官听说多滿意 手拚絲疆出壇外

三界符官痛行上馬 去了去了 酒滿三味

三封表張一齊文帶

做會之後 象象菱財 萬事滿意

下界女手

符用清冰碗著燒因紅散花吐老片到

汝凡收界 連魂

五色云居留六九

太平天子朝元丹

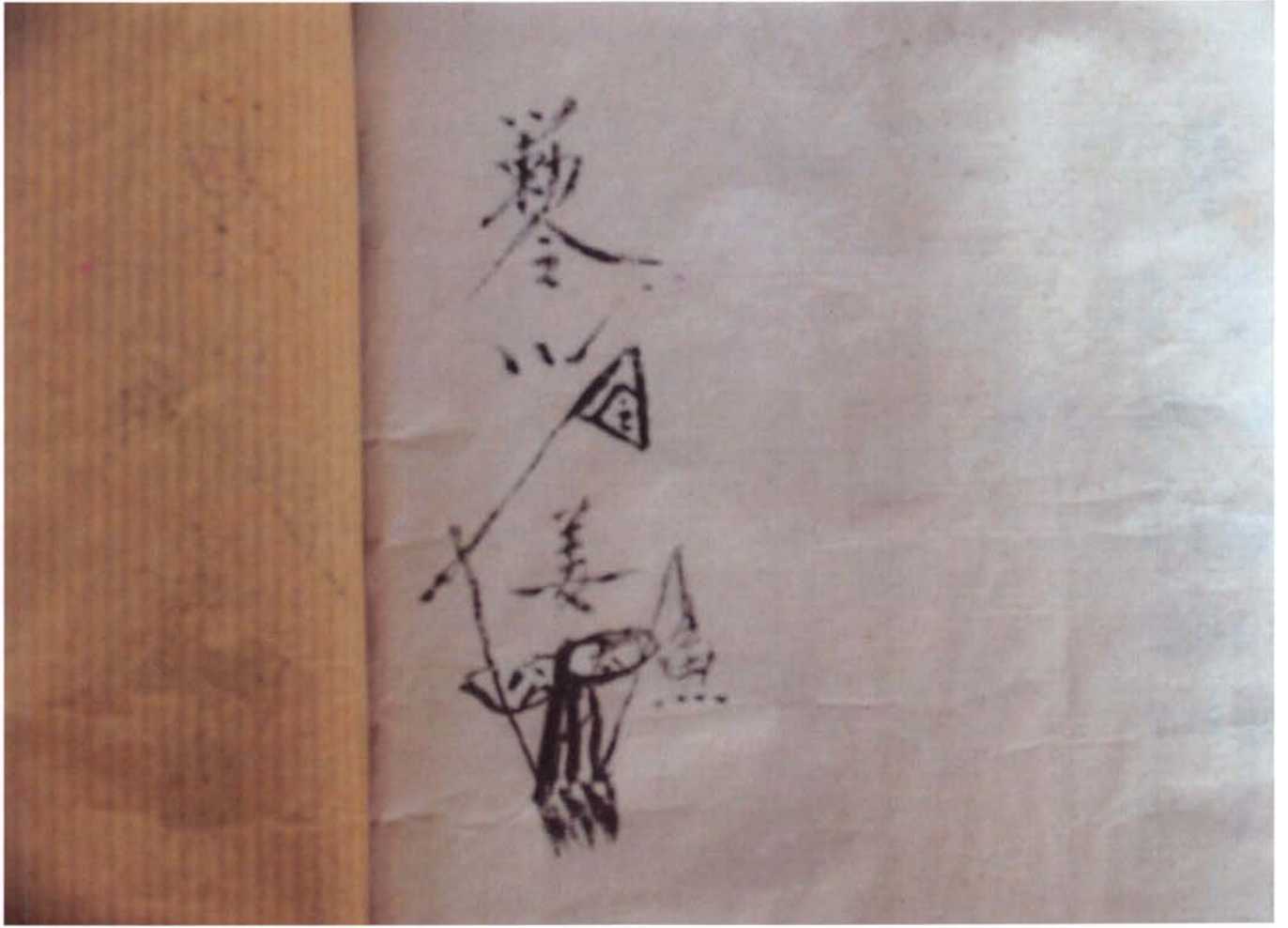
仙人^學上符容

金辰當頭筆有半

用新白布條二寸寬

画符念咒

卷



兄妹分裙

冒 建華 抄

上田 望 朱 瑞平 林 志英 校

紫金爐內把香焚 先表君來後表臣
大明成化登龍位 風調雨順國太平
海上漁¹人當獻寶 山中獵戶進麒麟²
正是我王多有道 要表蔡州小縣人
說起蔡州壽昌縣 有一財主姓梁人
官名叫做梁中勉 萬貫家財無比倫³
祖居離城十五里 三官店住梁家村
娶⁴妻單氏善良女 他是吃素修心人
未生三男和四女 只生男女一雙人
男取學名梁子玉 女取花名叫賽金
子玉年交十歲整⁵ □□□學念功名
相公生來多聰明 詩書念過學五經
小姐年方七歲整 西樓學習做針云
描龍綉鳳般般會 落雁沉魚美十分
不表一雙兄妹話 再表單氏女佳人
一心一意求佛道 北樓日夜把香焚

¹ 原寫作“魚”，今正。

² 原寫作“林”，今正。

³ 原寫作“論”，今正。

⁴ 原寫作“取”，今正。下同。

⁵ 原寫作“正”，今正。下同。

太陽過午他不吃 夜不解衣入房門
安下佳女修心苦 感動西方一聖人
單氏女 苦修心 串成十字求佛君
單氏女 在北樓 修心吃素 早燒香 晚換水 禮拜神明
每日間 在北樓 焚香點燭 念陀佛 誦真經 就把香焚
日裡間 吃午飯 要過中午 每日間 歸房睡 不脫衣襟
單氏女 苦修心 每日苦修 感動了 靈山上 燃燈道人
燃燈佛 發慈心 下凡變人 念真經 駕祥雲 就往前行
雲裡走 霧裡行 走得好快 前到了 壽昌縣 小小縣城
有神人 急忙忙 繞身一變 變一個 小和尚 坐在大門
不表那 小和尚 來把經念 再表那 北樓上 單氏佳人
忽聽佛號與魚聲 忙出北樓看分明
安下正在佛堂座 打動修心心一片
一連轉了幾個彎 不卻到了大門庭
夫人舉目擡頭看 看見出家一僧人
閉目垂眉念經苦 阿彌⁶陀佛不住聲
夫人當時忙開口 師父連連叫幾聲
你在我門將經念 為什事來為何因
莫是寶山倒下了 今來務化修山門
果是佛像剝落了 求化施主塑金身
莫是佛像要油漆 求化善人助錢文

⁶ 原寫作“迷”，今正。

莫是房屋嫌窄了 另添房屋起廟門
莫是高僧日漸衆 要化柴火齋衆僧
一一說與我知道 我家做個發心人
和尚聽說開言道 善人連連口內稱
不是山門倒壞了 不是佛爺塑金身
不是油漆將錢化 不化金來不化錢
貧僧腹中飢餓了 只化一頓飯吞吞
安人聽了這句話 忙請和尚入門庭
先叫和尚且先坐 我到廚房說分明
一直來到後堂內 叫聲傭人梅香身
梅香聽得安人叫 急急忙忙到來臨
夫人叫我有何事 叫我前來有何因
今有和尚路過此 化頓素飯好動身
你身快到廚房內 鍋碗鏟勺洗乾淨
好好素齋辦一桌 切莫沾上一點葷
桃梅當時連聲應 邁步如飛入廚門
說起梅香人一個 他是傷天害理人
葷肉鍋兒不成洗 胡亂辦飯送中庭
將菜擺在桌子上 安人哪知半毫分
單氏忙把和尚請 師傅上坐莫嫌輕
安人見佛忙上坐 口念經文不住聲
經文念完忙舉筷 要念善人一點情

正然舉箸風頭過 一噴腥味好難聞
和尚連忙放下箸 知道菜內有葷腥⁷
怒氣沖沖開口罵 大罵單氏不良人
吃什素來修什的心 看什的佛來念什經
要齋僧來就齋僧 應該親自下廚門
為何要把丫環用 辦了葷飯騙我僧
你今破了我的戒⁸ 天大的罪過了不成
小僧本是胎裡素 一口淡飯到如今
只怕佛爺知道了 打下地獄十八層
和尚說罷他去了 氣壞了單氏女佳人
急忙來到廚房內 揭開鍋蓋看分明
只見鍋內油花起 正是葷鍋了不成
心中發了幾名火 只罵桃梅小賤人⁹
奴家修心多日久 今日功勞化灰成
佳¹⁰人越罵越起勁 手執家伙下無情
一把抓住桃梅髮 渾身打得紫共青
打了一場松了手 恨恨回轉北樓門
桃梅被打嚎啕哭 心恨夫人他無情
此仇此怨今不報 枉在人間活現形
思思想想生巧計 陡¹¹生一計想在心

⁷ 原寫作“星”，今正。

⁸ 原寫作“界”，今正。下同。

⁹ 原寫作“千人”，以意正。

¹⁰ 原寫作“家”，今正。下同。

拿了銀子十多兩 送於東山老道人
買了僧鞋和僧襪 藏在經堂裡邊存
回頭來到南樓上 便把員外口內稱
你今坐在南樓上 果知北樓大事情
安人修心總是假 私通僧人是真情
你今只顧南樓坐 果知戴¹²了綠頭巾
員外聞言聽不相信 罵聲丫環嚼舌根
安人一身多正道 他是修心念佛人
桃梅又把員外叫 丫環怎敢亂胡行
我愛員外恩德厚 特來急報你當身
常常看見那和尚 生得年青貌出群
不怪安人將他愛 就是我桃梅也動心
今日早上下大雨 花園灘路不能行
和尚赤腳回去了 丟下僧鞋在樓門
員外若還不相信 快到北樓看分明
當時員外生疑心 直奔北樓看真情
梁員外 怒氣生 串成十字辨假真
梁員外 到北樓 擡頭觀看 滿樓上 房裡邊 細看真情
梁員外 都找過 不見形影 查不到 僧鞋襪 哪裡藏存
急忙忙 到經堂 幔子揭起 見僧鞋 和僧襪 果然是真
梁員外 見鞋襪 高聲大罵 罵一聲 單氏女 大膽賤人

¹¹ 原寫作“斗”，今正。下同。

¹² 原寫作“帶”，今正。下同。

我當你 修佛道 真心苦修 誰知你 將和尚 勾進我門¹³
那僧鞋 和僧襪 哪裡來的 快快的 來說出 饒¹⁴你性命
只因你 在北樓 偷人快樂 叫我戴 綠頭巾 臭名難聞
老員外 只罵得 如如烈火 拳也打 腳也踢 就下無情
只打得 那佳人 渾身發青 那佳人 只疼得 哭訴冤情
且將十字收留住 再將七字敘前因
安人被打嚎啕哭 跳在黃河洗不清
員外打了好一會 丟下手來說原因
手指夫人高聲罵 無恥淫婦¹⁵你思聽
要你今日去尋死 快尋無常見閻君
投河又要過發水 上吊又要一根繩
倘若明天看見你 剝你皮來抽你筋
罵罷一場他去了 哭壞單氏受屈人
明明白白家內坐 憑空降下大禍根
不知哪個將我害 暗藏僧鞋挑夫君
左思右想知道¹⁶了 此人猜作八九分
必定桃梅記了仇 暗生毒計害我身
害我一身也罷了 怎捨兒女一雙人
安人正在心中苦 來了兒女一雙人
聽說娘親被父打 來問娘親為何因

³ 原寫作“們”，今正。下同。

⁴ 原寫作“繞”，今正。

⁵ 原寫作“夫”，今正。

⁶ 原寫作“到”，今正。下同。

如人見了兒和女 抱住兒女放悲聲
叫聲嬌兒不好了 你今要做沒娘人
可恨桃梅喪¹⁷天理 生下毒計害娘身
可恨你父沒道理 打娘又逼死來尋
你娘一死也罷了 丟下嬌兒靠何人
佳人哭得傷心處 手挽嬌兒一雙人
一直來到花園內 涼亭坐下放悲聲
兒呀 我若今夜尋了死 你父必定娶補房
娶了人家賢德¹⁸女 看照兄妹兩個人
娶了人家不賢女 怕的拷打你當身
倘若晚娘要打你 雙膝跪下叫娘親
鐵打心腸叫軟了 自然不打你當身
晚娘廚房去煮飯 不能站在灶角旁
不比親娘在世日 未動開鍋挑你吞
有娘的雞兒跟娘走 沒娘的小雞曬太陽
千枝桃花一樹生 都是我的好嬌生
不表單氏嚎啕哭 再表神差鬼使們¹⁹
只因夫人辦葷飯 故²⁰佛降罪女佳人
就將夫人魂沒去 夫人打下地獄門
一連三陣狂風起 佳人攝到地獄門

¹⁷ 原寫作“上”，今正。下同。

¹⁸ 原寫作“得”，今正。

¹⁹ 原寫作“門”，今正。

²⁰ 原寫作“古”，今正。

狂風攝去生身母 嚇壞兄妹兩個人
不知親娘哪²¹去了 留下一條八幅²²裙
四幅蓋住梁子玉 四幅蓋了女佳人
兄妹當時無可奈 哭哭啼啼²³轉家門
一日三來三日九 不見親娘轉回程
員外不問消息事 苦壞嬌生兩個人
誰知父親心腸狠 看上桃梅一個人
眉來眼去喜心上 言聽計從在房門
桃梅生來心腸狠 要害兄妹一雙人
時時刻刻起歹意 日日來打兄妹們
當時二人無可奈 去做逃命避難人
離了自家門兩扇 二人訴苦好傷心
哥哥就把妹妹叫 妹妹又把兄長稱
我等逃難分手去 日後相逢要憑證
急忙取出羅裙子 各分四幅帶在身
若能有個相會日 只認寶貝不認人
二人路口分了手 兄向東走妹西行
不表子玉路上話 表起小姐梁賽金
不分東西與南北 哪顧高低²⁴路不平
正是上天天無路 要想入地地無門

²¹ 原寫作“那”，今正。下同。

²² 原寫作“福”，今正。下同。

²³ 原寫作“帝帝”，今正。

²⁴ 原寫作“底”，今正。

姑娘正在為難處 來了添油送火人
來了來了真來了 來了無兒無女人
有個忠臣宗義成 一生無兒冷清清
老爺領了上司令 草橋關上管萬民
宗老婦夫同上任 路過壽昌小縣城
老爺聽得嚎啕哭 吩咐住轎²⁵看原因
只見小小一女子 莫奔亂走放悲聲
忙把女孩摻起來 宗爺細細問原因
你今幼小青年女 因何在此放悲聲
賽金女 苦上心 串成十字遇好人
宗老爺 去上任 從此經過 見路旁 小女孩 大放悲聲
那老爺 夫妻們 同有半佰 既無兒 又無女 沒得後根
宗老爺 他本是 行善之人 見女孩 這般苦 細問原因
問女孩 年幼小 所為何事 為什麼 苦傷心 眼淚紛紛²⁶
你果是 走錯路 迷失你家 你果是 前娘死 沒得母親
莫不是 你晚娘 心腸太狠 每日間 打罵你 逃出家門
把原因 說明白 讓我曉得 我念你 無投路 帶回家門
賽金女 聽得說 連忙下拜 遵一聲 老恩公 聽我原因
我家中 有丫環 名叫桃梅 提起她 這千人 狗肺狼心
我母親 求佛道 修心吃素 感動了 天上神 來度善人
那和尚 變和尚 來試我母 看我母 苦吃素 果有真心

²⁵ 原寫作“喬”，今正。

²⁶ 原寫作“紛紛”，今正。下同。

到門前 敲木魚 墓化茶湯 我母親 聽得說 發下善心
叫丫環 桃梅女 去辦素齋 誰知道 起壞心 肉湯煮粉
那和尚 知道了 沖沖大怒 說我母 假修心 欺了神靈
我母親 聽得說 氣得心疼 罵一聲 桃梅女 大膽千人
我教你 辦素菜 款待和尚 誰知你 起壞心 哄騙我身
我母親 只急得 心中火起 誰想到 那桃梅²⁷ 懷恨在心
那丫環 生巧計 偷買僧鞋 買僧襪 藏佛堂 害我母親
到南樓 哄我父 說母偷人 說我母 藏和尚 欺我父親
我父親 聽得說 北樓尋找 佛幔²⁸後 見僧鞋 信以為真
我父親 聽旁言 逼母去死 叫我母 去尋死 早見閻君
到明天 看見他 不成尋死 就將母 來殺死 定不容²⁹情
我母親 被我父 逼死以後 那桃梅 配我父 晚娘之人
只說道 這晚娘 照看兒女 誰想到 心毒狠 來害我們
那晚娘 將兄妹 日日打罵 兄妹們 無可奈 逃出家門
半路上 與哥哥 兩下分離 無投奔 苦傷心 啼哭悲聲
且將十字收留住 再將七字接前因
小姐未成說完了 氣壞了夫妻一雙人
老爺夫妻生慈念 叫聲小女聽原因
你今既是無投奔 有句話兒何可行
我今一生無兒女 少個墳前化紙人

²⁷ 原寫作“桃”，以意正。

²⁸ 原寫作“幔”，今正。

²⁹ 原寫作“榮”，今正。

你今既然來逃難 果肯同我轉家門
從此算我親生女 我家帶你長成人
姑娘聽說忙下拜 恩父恩母叫連聲
宗爺夫妻心歡喜 帶了小姐一同行
草橋關上上了任 夫妻待女賽親生
要得兄妹來相會 狀元³⁰及第轉家門
不說賽金有下落 再說子玉小官人
他與妹妹分了手 刀割膽來箭穿心
好似半空掉³¹下劍 斬斷人間骨肉親
急急忙忙往前走 慌張哪顧路不平
行一里來哭一里 走一程來放悲聲
娘被大風刮去了 不知死來不知生
父親聽咯賤人的話 害娘又害我二人
子玉越想越是苦 坐在路旁放悲聲
正是相公嚎啕哭 來了救苦救難人
來的不是別一個 山陽知縣卜大人
老爺為官多清正 聖旨升為御史身
夫妻同年有半百 未有香煙後代根
老爺上任從此過 路過官堂向前行
耳邊聽見哭悲聲 悲悲切切痛人心
老爺急忙向前看 分開轎簾³²看原因

³⁰ 原寫作“員”，今正。下同。

³¹ 原寫作“吊”，今正。下同。

啼哭真是一孩子 眉清目秀一個人
老爺忙把官人叫 喊到轎前問家門
子玉見問眼含淚 哭訴前因與後因
老爺見他生得好 叫聲孩兒你是聽
既然你身逃難出 進退無門哪處行
老夫一生無兒子 收你為兒行不行
子玉聽說老爺話 連忙跪下叫大人
既然大人施仁德 即刻依從叫父親
子玉轎前拜四拜 又到轎後拜母親
大人催動人扶起 晚宿晚行到了京
進了皇城門三座 安排家眷住了身
次日朝王見了駕 退朝上任進衙門
拜過同朝謁過相 放告點卯禮來行
大人各事停當了 即作家人請先生
請了高才先生到 教訓子玉讀書文
梁子玉改卜子玉 過目成章件件能
老爺夫妻多歡喜 公子孝順二雙親
正是日月如梭快 光陰似箭往前行
相公長到十九歲 滿腹文章無比倫
大人與他納了監 順天應試中舉人
報到御³³史衙門內 喜壞夫妻一雙人

³² 原寫作“蓮”，今正。

³³ 原寫作“玉”，今正。

開發報子他去了 同朝官員賀滿門
拜過房師與主考 相公用心讀書文
爆竹一聲辭舊歲 梅花幾點又交春
家家都把香來焚 戶戶笙歌享太平
元旦元宵³⁴都過了 當今開了大元門
皇榜掛在衙門外 天下舉子上京城
卜大人此時忙不住 收拾公子跳龍門
看看二月初八到 帶了紙筆入考門
三場已畢選好日 龍虎日成掛榜文
不在書中不交代 子玉中舉第一名
卜爺心中多歡喜 獲得榮華富貴生
三月三日皇登殿 立刻親點狀元身
狀元就是梁子玉 一舉成名天下聞
君王賜了三杯酒 親手摻起小愛卿³⁵
又到後宮朝國母 丈二紅綾掛頂門
狀元又領皇聖旨 遊街三日看皇城
吩咐一聲來開道 兩旁呼喚一條聲
狀元板安上了馬 執事滔滔往前行
前有幾班帶紗帽 後有幾班帶紅纓³⁶
銅鑼打得倉倉響 板子拖得一條聲

³⁴ 原寫作“霄”，今正。

³⁵ 原寫作“親”，今正。下同。

³⁶ 原寫作“嬰”，今正。

狀元及第牌兩扇 紅旗白馬多威風
遊街三日方已畢 想起家中大事情
恨的不是別一個 只恨桃梅小賤人
一家被他來拆散 事到如今記在心
忙連奏與萬歲主 家有母親受冤情
萬歲準了他的本 奉旨祭祖把冤伸
狀元謝恩將朝出 回衙告知繼父親
兒今回家將仇報 訪尋妹妹與母親
今日暫別雙父母 伸冤回來奉雙親
父母聽說雙流淚 叫聲嬌兒聽元因
只說養兒防身老 費了爺娘一片心
收養兒有十年整 把我嬌兒當親生
只說卜家有了後 誰知丟下二老人
烏鴉還有反哺日 小羊還有餵乳恩
禽獸³⁷尚且知禮意 人不知恩不如禽
父母要把寬心放 兒是知恩報德人
此去不過三兩月 趕早回來奉雙親
爺娘不必心焦悶 孩兒不忘撫養恩
狀元說罷含淚別 拜別二老就動身
吩咐執事往前走 直奔家鄉路上行
逢州³⁸自有州官接 過縣自有縣官迎

³⁷ 原寫作“情腹”，今正。

州官接來縣官迎 州縣官員忙不停
行程正是三春景 一路風光愛殺人
正行打馬往前走 到了草橋大關門
只見掛燈又結彩 宗爺跪接公館門
狀元當頭下了馬 步入公館坐安身
宗爺向前將安問 急急忙忙送點心
狀元回言不要用 只要龍碎麵湯下程
宗爺聽說忙答應 辭³⁹別狀元轉衙門
急忙又把廚師叫 龍碎麵湯辦先成
廚夫回言我不會 又叫李廚又不能
焦廚李廚都不會 氣壞宗爺一個人
二堂氣壞宗老爺 驚動後樓小千金
賽金正坐高樓上 聽得上樓放悲聲
高哭好似⁴⁰我恩父 低哭又像⁴¹撫養人
不知啼哭因何事 要下樓去看分明
不梳頭來不洗臉 隨身衣服下樓門
頭上烏雲整一整 足下弓鞋登一登
轉彎抹角來得快 二堂早在面前存
一見父親雙流淚 忙向前來問原因
上前幾步行過禮 萬福父親口內稱

³⁸ 原寫作“洲”，今正。下同。

³⁹ 原寫作“遲”，今正。

⁴⁰ 原寫作“是”，今正。

⁴¹ 原寫作“象”，今正。下同。

為什事來流眼淚 二堂上面放悲聲
有話說與女兒聽 做個消愁解悶人
宗爺開口叫女兒 今日不必把禮行
你不問來我不說 說起根由惱⁴²殺人
清清白白家中坐 來了新科狀元身
百味珍肴他不吃 只要龍須麵來吞
叫到焦廚師他不會 叫李廚師他不能
辦飯廚子總不會 活活難殺老年人
沒有龍鬚麵也罷了 丟官是小命難保
我兒若是男子漢 為父與你計較行
只因你是裙衩女 叫你能說不能行
賽金聽說這句話 叫聲父親聽原因
你女當做什麼事 為的龍鬚麵當點心
不是女兒誇大口 此麵女兒能辦成
父親且到後堂去 兒到廚房辦現成
父親聽說心歡喜 女兒真正手段能
女兒能辦龍鬚麵 為父放下一條心
說罷老爺他去了 小姐回轉後樓門
上樓渾身換衣服 綢衣脫去換布襟
下了樓門廚房進 順代幾句古人名
小麥生來麵皮黃 五穀之中它⁴³為強

⁴² 原寫作“腦”，今正。

⁴³ 原寫作“他”，今正。

九月十月成下去 五月⁴⁴六月收上場
社社播播巧三姐 磨房受苦李三娘
磨子磨得粉粉碎 羅巨篩得白如霜
羅巨把起薛仁貴 倒在包家黑烏盆
翻起北方王鬼水 五霸請候鬧崑陽
霸王將鼎⁴⁵來舉起 放在張飛肉案上
太祖玉棒拿在手 打他光武鬧崑陽
打來打去劉成美 跌來跌去阮比山
切他一個子須臾 搥鼓三咚斬蔡陽
先切龍頭後切尾 龍爪切得一樣長
粗是蛾眉細是綫 條條內邊灑砂⁴⁶糖
洗洗鍋來翻上水 鍋灶門口抱柴王
點起南方丙丁火 孟良胡盧放豪⁴⁷光
一把兩把燒開了 三把四把滾了湯
姑娘一見水燙⁴⁸了 龍麵下在水面上
下在鍋內團團轉 雲中龍戲霧⁴⁹中龍
楊排鳳早溜拿在手 盛在劉龍碗中央
先盛龍頭後盛尾 四爪搭在碗邊上
何仙姑托盤拿在手 順帶象牙筷一雙

⁴⁴ 原寫作“馬”，今正。

⁴⁵ 原寫作“頂”，今正。

⁴⁶ 原寫作“沙”，今正。

⁴⁷ 原寫作“毫”，今正。

⁴⁸ 原寫作“湯”，今正。

⁴⁹ 原寫作“霧”，今正。

快走又怕潑了湯 慢走又怕冷了湯
不緊不慢來得快 二堂早到面前存
開口便把父親叫 龍麵快送狀元身
狀元看見龍鬚麵 便知龍麵細摻情
老爺捧了龍鬚麵 送到龍棚裡邊存
就把龍麵來送上 一旁伺候狀元身
狀元見了龍鬚麵 想起開懷餵乳娘
新狀元 吃龍麵 串成十字想前情
新狀元 見龍麵 心中思想 猛想到 生身母 養育母親
想當初 這龍麵 婆婆會做 這巧手 只傳與 我的母親
我娘親 學會做 無價⁵⁰之寶 到後來 又傳與 妹妹賽金
前思思 後想想 心中思想 莫不是 這女子 是我妹身
倒⁵¹不如 在此間 細細訪問 若訪到 親妹子 同轉家門
新狀元 此時間 心中又想 這龍麵 哪方人 親手做成
老關爺 忙跪下 稟告大人 這龍麵 是我女 親手做成
新狀元 吃龍麵 想起好苦 想好了 兄妹們 哪塊安身
倒不如 即刻間 來訪妹子 將關爺 來叫出 細問原因
問關爺 這女兒 果是親生 或抱的 或拾的 說與我聽
宗老爺 聽得說 回言便答 叫一聲 新狀元 聽我來因
與那日 奉聖旨 高關上任 見路旁 有女子 哭訴聲音
那女子 哭訴得 實在傷心 便將那 女兒事 問出原因

⁵⁰ 原寫作“佳”，今正。

⁵¹ 原寫作“到”，今正。下同。

那女孩 見我問 說出真情 說母被 桃梅害 死去無影
那桃梅 到後來 配他父親 每日間 打罵他 兄妹二人
兄妹們 無可奈 逃出家門 半路上 分離了 永無信音
我妻子 聽此言 極共不忍 我心疼 將女孩 帶回家門
這女孩 拜我了 為我義女 我夫婦 喜愛她 猶⁵²如親生
新狀元 聽此言 開言便叫 我請你 叫你女 來見我身
宗老爺 聽得說 連忙開口 叫丫環 和使⁵³女 聽我原因
到西樓 對姑娘 說個明白 快快的 到前庭 來見大人
且將十字收留住 再將七字接前因
小姐來到前廳上 女兒便把父親稱
父親叫兒有何事 你把事情說我聽
宗爺見問忙開口 便把女兒叫一聲
你做龍麵狀元吃 狀元陡然淚紛紛
果是胡椒放多了 麻得狀元淚淋淋
老爺說罷他去了 狀元開口把話論
關爺是你親生父 還是你的義父身
姑娘聽說忙回答 他是我的義父親
狀元聽說忙開口 叫聲姑娘聽原因
家住何州並何縣 根本家鄉哪裡人
父姓什來母誰氏 姑娘叫個什麼名
姑娘聽說忙回答 大人在上聽原因

⁵² 原寫作“尤”，今正。下同。

⁵³ 原寫作“使”，今正。

問我家來家不遠 不是無名無姓人
家住蔡州壽昌縣 三官殿前梁家村
父親名叫梁宗勉 母親單氏女賢人
未生三男和四女 只生兄妹人一雙
兄長名叫梁子玉 奴家⁵⁴名字叫賽金
我娘吃的胎裡素 求吃常齋不開葷
不吃養魚池內水 不吃葷鍋煮的湯
那日來了一和尚 坐在門前念經文
不化金來不化銀 化頓素齋好動身
我娘打發桃梅女 煮些飯菜齋僧人
可恨賤人傷天理 葷鍋辦飯待僧人
卻被僧人曉得了 罵奴開懷餵乳人
貧道本是胎的素 開我齋來罪不輕
一日佛爺知道了 打入地獄十八層
僧人說罷他去了 氣壞親娘打賤人
不過打他三五下 結下仇來似海深
可恨桃梅生歹計 暗藏僧鞋害母親
仇人又把父親挑 謊言巧語哄父親
父親信了他的話 親娘房裡去找尋
尋到僧鞋與僧襪 苦打親娘一個人
親娘萬分無可奈 只得無常入幽⁵⁵門

⁵⁴ 原寫作“佳”，今正。下同。

⁵⁵ 原寫作“凸”，俗子，今正。

一手挽了奴兄長 一手挽了我當身
母子哭進花園內 譙⁵⁶樓將打鼓三更
誰知陡然狂風起 親娘刮去無影形
兄妹二人擡頭看 不見開懷餵乳人
不知親娘哪去了 留下一條八幅裙
四幅蓋了奴兄長 四幅蓋了小奴身
兄妹二人回家轉 哪知桃梅伴父親
賤人當時又生計 思量斬草又除根
兄妹二人無可奈 共做逃難離家門
每人帶了裙四幅 日後相逢作證憑
三岔⁵⁷路口分了手 不知哥哥哪方存
小奴哭倒路旁邊 來了恩人宗義成
夫妻一身無兒女 收了奴家當親生
將奴帶到草關上 撫養奴家十年春
狀元大人從此過 還要龍麵當點心
龍麵本是我辦的 ⁵⁸望求大人恕⁵⁹小生
這是我奴真情話 並無謊言哄大人
狀元聽說這番話 心中不卻吃一驚
只說他是哪一個 誰知是我妹妹身
開言便把姑娘叫 叫聲姑娘聽原因

⁵⁶ 原寫作“瞧”，今正。

⁵⁷ 原寫作“叉”，今正。

⁵⁸ 原寫作“忘”，今正。

⁵⁹ 原寫作“怒”，今正。

要是你哥見了你 你果認得他當身
我在半路收馬童 名家也叫子玉身
他說與妹妹分了手 要我妹妹回家門
小姐聽說這句話 聽聲狀元聽原因
你叫哥哥來到此 我在這裡會他身
狀元聽了忙回答 便把姑娘叫一聲
姑娘要見你兄長 兄長在你面前存
賽金聽說紅了臉 罵聲狀元不正經
枉讀詩書無禮義⁶⁰ 冒認哥哥罪不輕
若還父親知道了 你的烏紗戴不成
狀元聽說開言道 叫聲妹妹你是聽
當日兄妹分了手 你兄啼哭向北⁶¹行
我在官塘來啼哭 遇到恩公卜大人
把我帶到他家去 過繼為子當親生
就在他家將書讀 皇一開考跳龍門
你兄中舉第一名 特意回家報仇恨
我今行了多日久 路過草橋高關門
非是要把龍麵吃 哪曉妹妹在此存
叫聲妹妹認了我 一同回家祭祖墳
賽金又把大人叫 我有言語你是聽
既是兄長梁子玉 我把家事問大人

⁰ 原寫作“議”，今正。

¹ 前文云：“兄向東走妹西行”。

家中房屋有多少 幾座⁶²樓房幾扇門
誰在東樓學文字 誰在西樓綉針雲
哪個南樓好飯酒 誰在北樓念經文
門前栽了幾排柳 後門栽了幾排桑
東西巷口有何物 太府門朝哪一方
哪塊有個土地廟 何處有個養魚塘
這是家中一番話 請問新科狀元身
說得真來對得真 我有同胞共乳人
說不真來對不真 你是違⁶³條犯法人
子玉又將妹妹叫 叫聲妹妹你是聽
別的事情不曉得 家中一切我知情
前後四十九間房 四處堂樓安四方
父親前樓好吃酒 母親後樓念經文
為兄東樓學文章 小妹西樓綉針雲
前門栽了五排柳 五排桑樹在後門
五排柳上扣驢馬 牛羊扣在桑樹存
花園有座三官殿 母親日夜把香焚
青龍池內土地廟 西北角上碾坊開
正西有個八角井 東北有個養魚塘
這是家中一番話 請問妹妹果是真
賽金聽說大人話 一字不差半毫分

⁶² 原寫作“坐”，今正。下同。

⁶³ 原寫作“爲”，今正。

家中事情已明白 初會家中問一問
外公九十幾歲死 婆婆幾十見閻君
大舅名字叫什麼 二舅叫個什麼名
還有一個三舅舅 衆人定他什麼名
大舅娶的哪家女 二舅娶的哪家人
還有一個三舅母 至今果成過門庭
親娘排行幾胎生 花名叫做什麼名
這是外公家內事 請你狀元說我聽
如若一字對不準 你是犯法違條人
狀元又將妹妹叫 叫聲妹妹聽真情
別的事件不知道 外公家事記得真
外公八十三歲死 外婆七十二歲死
大舅名字叫單龍⁶⁴ 單虎是我二舅名
家中還有三舅舅 混世王來是壞名
大舅娶的馮氏女 二舅定的李家人
還有一個三舅母 至今未成娶過門
我母本是隔胎生 花名叫做單素貞
理⁶⁵當不講母親名 妹妹龍棚太頂真
賽金聽了他的話 一點不差半毫分
心中又想一件事 又問大人說原因
別的事兒不問你 八幅羅裙問大人

⁴ 原寫作“氏”，以意正。

⁵ 原寫作“禮”，今正。

還是羅來還是紗 誰人討帳帶回程
哪個剪來哪個裁 哪個巧手巧做成
正帖敲來後帖敲 什麼腰來什麼裙
什麼綾子吊的禮 什麼帶子定兩根
上有多少環玲子 幾對綉帶順風動
誰人四十花壽誕 哪個來了迎親鄰
這是羅裙一段話 請你大人說原因
若是一字對不準 哪怕太子也不認
子玉聽說這番話 妹妹做事太認真
別的事情不知道 八幅裙料記得真
不是羅來不是紗 父親討帳帶回程
舅母剪來新娘裁 妹妹巧手巧做成
不是正帖是反敲 上頭連的是白綾
銀紅綾子吊的禮 粉紅帶子定兩根
上有五百環玲子 八條綉帶順風迎
父親四十花壽辰 母親穿了迎親鄰
只因母親受了屈 八幅羅裙兩物⁶⁶分
三岔路口分了手 一別之時到如今
妹妹若是不相信 取出親娘貴寶珍
伸手取出裙四幅 放在桌上來對證
妹妹也取無價寶 才信同胞共乳人

⁶⁶ 原寫作“務”，今正。

沒有親娘裙四幅 就是仙人也不認
小姐看見裙四幅 猶⁶⁷如拾到一方金
急忙走上高樓去 也取親娘四幅裙
忙把裙子拿在手 來到龍棚對寶珍
兄弟龍棚來對寶 不見親娘一個人
只說不得來相會 誰知枯木又逢春
狀元大人忙跪下 拜謝天地與神人
新科狀元梁子玉 忙把妹妹叫幾聲
還是同我回家轉 還是在此奉雙親
賽金聽罷哥哥說 叫聲哥哥聽原因
等我告知雙父母 回來與你一同行
小姐說罷他去了 轉彎抹角到中廳
賽金雙膝來跪下 報與恩父恩母親
新科狀元梁官人 他與奴家一母生
你女與他回家轉 祭過祖先再回程
時間不過三五日 恩父恩母放寬心
女兒不是負⁶⁸義人 回來養老二雙親
老爺聽說這一聲 冷水澆到腳後跟⁶⁹
我女同哥回家去 丟下二老靠何人
宗老爺 淚紛紛 串成十字訴原因

⁷ 原寫作“龍”，今正。

⁸ 原寫作“付”，今正。

⁹ 原寫作“根”，今正。

想那日 奉聖旨 高關上任 半路上 遇見了 苦命嬌生
你將那 冤和苦 告訴與我 你說的 那些話 令人心疼
我念你 小女孩 年紀幼小 聽說的 言共語 都有來因
我夫婦 可憐你 沒處投奔 生慈念 收留你 帶到衙門
兒那時 年七歲 到了我家 為父的 撫養你 整整十春
為養你 苦命孩 猶如命根 費盡我 夫妻們 萬苦千辛
六月裡 天氣熱 兒出豆症 老夫妻 為的你 東走西奔
老夫妻 為兒病 不大要緊 費了我 有□□ □□之心
老夫妻 為的你 吃辛受苦 勸孩兒 莫要做 負義之人
痧痲豆疹一百天 腳板着地才放心
神堂各處去還願 大香大燭謝神明
只說撫養你成人 招房女婿倒進門
後來生個小孩兒 外孫給我燒紙文
古人言語說得好 有假兒來沒假孫
今日我兒回家去 不可忘了二老人
烏鴉還有反哺日 小羊吃乳跪埃塵
口咬尿包空費力 竹籃打水一場空
肚腸出來肚腸生 肉上生肉親又親
頭上摸摸青絲髮 身上摸摸好衣巾
摸上摸下疼死我 難捨我兒離我身
鋼刀割去心上肉 箭射肝腸滿肚疼
今日我兒回去了 不知回程不回程

姑娘聽了一番話 兩眼不住淚淋淋
理理羅裙忙跪下 萬福爹娘口內稱
我同兄長回家去 一同回家祭祖墳
二次還到高關上 服待爹娘二雙親
日後爹娘歸西去 兒做披麻戴孝人
義成聽了賽金說 叫聲乖乖小嬌生
我兒同哥回家去 為父言語要記心
下次從我高關過 一定要到我衙門
要是為父還在世 辦酒接待我兒身
若是父親不在世 買刀毛冒上上墳
為父今日拜托你 也看撫育一片心
這是為父心裡話 牢牢切切記在心
你到後樓辭你母 收拾用物帶動身
不表宗爺心悲切 再表小姐上樓門
小姐來到高樓上 告訴母親得知情
母親聽說這句話 心中難捨我兒身
我兒今日回家去 不知何日轉回程
為娘現在送你走 表表你母一片心
夫妻二人來相送 站在門前淚淋淋
不表夫妻心中苦 再表兄妹兩個人
狀元發動人和馬 一路滔滔向前行

逢山不看山中景 遇⁷⁰水不看取魚人
在路行程來得快 早到壽昌梁家村
狀元吩咐衆人馬 大炮三聲入府門
兄妹來到大廳上 請出生身老父親
二人連忙來跪下 訴說分離一段情
員外此時心歡喜 自思當年太狠心
今日我的兒女到 不見同床共枕人
不表員外心中苦 再表狀元一個人
狀元急忙傳下令 後堂提出黑心人
喝叫手下快動手 用刑拷打不容情
桃梅拷打忍不住 只得招出陷害情
員外聽了才明白 咬牙切齒恨妖精
中勉當時來吩咐 安排靈座供安人
內外大廳掛了孝 中堂改做法場門
就把桃梅來綁起 供在靈前活祭人
父子兄妹放聲哭 兄妹只哭苦娘親
不表一家來悲苦 再表狀元一個人
吩咐扒出桃梅心 前來祭祀⁷¹老母親
祭過一場方已畢 忙把屍首送出門
把她拋在荒郊地 狼吞狗咬活報應
不表桃梅報應話 再說狀元考心人

⁷⁰ 原寫作“與”，今正。

⁷¹ 原寫作“祝”，今正。

急忙開喪來守孝 請個什麼念經文
全城官員來吊孝 親戚鄰居總上門
一連四十九天過 子玉守孝已完成
梁子玉與小賽金 孝心感動佛世心
只見兄妹誠心大 地府提出老安人
佛爺就把單氏叫 你今前來聽原因
老僧下凡去度你 只怪你身不當心
用了桃梅供祭你 應該打入地獄門
念你兒女多行孝 放你回去會親人
安人當時稱多謝 謝謝西天大神人
佛爺就把揭帝喚 相送安人轉家門
一陣香風來得快 早到梁家北樓門
霹靂⁷²一聲驚天響 安人送入佛堂門
丫環見了忙通報 合家老小來看明
宗勉一見親妻子 上前抱住放悲聲
我只說今世不相見 誰知枯木又逢春
多虧老天來保佑 一家骨肉又相逢
一家哭罷方才了 忙擺香案謝神人
此時全家團圓⁷³會 一家收拾祭祖焚
拜罷祖墳回府內 子玉收拾要進京
員⁷⁴外安人不肯去 同在佛堂苦修心

⁷² 原寫作“力”，今正。

⁷³ 原寫作“員”，今正。

賽金在家侍奉母 狀元上京交旨文
出府放了三聲炮 人馬滔滔上路行
在路行程來得快 早到皇城一座城
次日五鼓朝王駕 奉明報仇一段情
又奏母親還魂轉 仰仗皇上雨露恩
小臣又有一道本 表奏恩深意重人
一表叫做宗義成⁷⁵ 一個就是卜大人
伏望我主洪恩大 普發恩論與二臣
君王準了子玉本 吩贈宗卜二大人
子玉生父與生母 恩封一品在家門
狀元欽授學士職 伴讀太子內宮門
卜大人吩為御史職 議成升為太歲名
狀元當時將恩謝 退後三步出朝門
一直來到御史府 繼父義子又相逢
草橋關爺得了報 不願為官管萬民
夫人當時來收拾 雙雙同到梁家村
會見安人和員外 拜謝宗爺留女恩
賽金小姐來叩見 晨昏服侍勝親生
卜爺辭朝告了老 子玉孝養轉家門
三家同住在一塊 大團圓在梁家村

⁷⁴ 原寫作“元”，今正。

⁷⁵ 原寫作“議誠”，前文云：“義成”，今正。

子玉取娶了名家女 連生五子貌超群
一子繼了卜爺家 祭禮承擔報深恩
賽金也配名家子 連科及第入朝門
三家六老登大壽 共收朝庭雨露恩
此書名叫分裙記 龍鬚麵傳到如今
奉勸世人要學好 莫學桃梅黑心人
勸人學好有好處 生下兒女高官升
為人在世不學好 到老終身沒後成
勸人在世要行善 莫學五逆不孝人
世人在世行正道 子子孫孫發萬金
收香收燭收紙馬 收納錢糧轉天門

□□⁷⁶瓶 酒滿斟 聽了此書要□⁷⁷心

一九九五年三月初五日抄

⁷⁶ 此字漫漶不清，《楊家將》云：“托金瓶 酒滿斟”，《魏九榮出世》云：“托壺瓶，酒滿斟”。待考。

⁷⁷ 此字漫漶不清，待考。



夫人甚时悦开口
 闭目垂眉念经苦
 夫人举目抬头看
 一连转了几行
 息听佛号与鱼声
 望下正在佛堂坐
 不表所和山尚来把经念
 有神人急忙之脱身一更
 云里走雾里打老得招快
 燃灯佛发慈心下凡渡人
 单化女女有心每日苦修
 志勤灵山上燃灯道人

师父连
 所进陀佛不任声
 看见出家一僧人
 予却到了大门庭
 忙出北楼看分明
 忙到修心一片

再表北楼之单化佳人
 更一个和尚坐在大门
 前到了寿昌县小小县城
 念愿还空祥云就往前行
 志勤灵山上燃灯道人

日里间吃伴做 更时甲午 每日间归看睡不脱衣襟
 每日间在北楼 焚香点烛 念陀佛诵真经 就起香赞
 单化女女在楼 有心吃素 早晚香晚换水 礼拜袖袖
 单化女 苦修心 事毕十字求佛 君
 定下佳女修心苦 志动西方一圣人
 太阳过午他不吃 夜不解衣入房门
 一心一意求佛道 北楼日夜把香焚
 不表一双兄妹话 再表单化女佳人
 描龙绣凤般之会 落雁飞鱼美十分
 小姐年方七岁正 西楼学牙做针云
 相公生来多聪明 洋书念过五经

3
 蒙由银子不成洗
 说走梅香人一个
 桃梅当时连声应
 好之素斋办一桌
 你身快利厨房内
 今有和尚路过此
 夫人叫我有何事
 梅香听得安人叫
 一直来到后堂内
 先叫和尚且先坐
 皮人听了这句话
 胡乱办做送中庭
 他是当天宰牲人
 迈步如飞入厨门
 切莫沾上一桌草
 铜碗钵勺洗干净
 化板素饭好动身
 叫我前来看有何因
 得急之忙之到来临
 叫声佣人梅香身
 我到厨房说分明
 忙请和尚入门庭

贫僧腹中饥饿了
 不是油漆将钱化
 不是山门倒坏了
 和尚听说开言道
 一一说与我知
 莫是高僧日渐众
 莫是房屋嫌窄了
 莫是佛像要油漆
 果是佛像剥落了
 莫是宝山倒下了
 你在我门将经念

只化一顿饭吞吞
 不是佛爷塑金身
 善人连之口内称
 我家做个发心人
 要化火帝念僧
 另添房屋起庙门
 求化善人助钱文
 求化施主塑金身
 今来各方化何山门
 为什事来为何因

桃梅被打噯啾哭
打了一场松了手
一把抓住桃梅发
家人越骂越起劲
奴家修心多日久
心中发了几名火
只见锅内油花起
急忙来到厨房内
和尚说罢他去了
只怕佛爷知道了
小僧本是胎里素

心恨未人转
恨之回转北楼门
浑身打得紫青青
手和家伙下无情
今日功劳化灰成
只骂桃梅小千人
正是荤锅了不成
揭开锅盖看分明
气坏了单代女佳人
打下地狱十八层
一口淡饭到如今

你今破了我的界
为何要抱丫环用
要希僧来就希僧
吃什素来修什的心
怒气冲冲开口骂
和尚连忙放下筷
正就拳风笑过
经文念完忙拳筷
安人见佛忙上坐
单代忙把和尚清
将菜摆在桌子上

天大的罪过了不成
办了荤饭骗我僧
意该来自下厨门
看什的佛来念什经
大骂单代不良人
知道菜内有荤腥
一喷腥味好难闻
要念善人一点情
口念经文不住声
师傅上坐莫潦轻
安人那起半卷心

急忙了到空堂慢子端起
梁员外却我过不见踪影
梁员外到桃梅指来观着
梁员外怒乞生
当时员外生疑心
员外若还不相仪
和尚赤脚回去了
今日早上下大雨
不怪安人将他爱
常之看见那和尚
我爱员外恩德厚

见僧鞋和僧袜果然是真
查不到僧鞋袜哪里去了
满楼上的房里也油看真情
串成十字牌假真
直奔北楼看真情
快到北楼看分明
天下僧鞋在楼门
花园难路不能行
就是我桃梅也动心
生得年青貌玉群
药来急报你自身

桃梅又把员外叫
安人一身多正道
员外闭言听不想
你今只顾南楼坐
安人伴心总是假
你今坐在南楼上
回头来到南楼止
买了僧鞋和僧袜
拿了银子十多两
心思想之生巧计
比仇比怨今不报

丫环怎敢乱胡行
他是修心念佛人
骂声丫环嚼舌根
果知带了绿头巾
私通僧人是真情
果知北楼大事情
便把员外口内称
藏在空堂里皮存
送于东山老道人
斗生一计想在心
枉在人间活现形

如人见了儿和女
 听说娘亲被父打
 安人正在心中苦
 害我一身也罢了
 必定桃梅记了仇
 左思右想知到了
 不知听尔将我害
 明之白白之家内坐
 骂罢一场他去了
 倘若明天看见你
 投河又要过炭水
 抱住儿女教悲声
 向娘亲为何因
 来引儿女一双人
 怎舍儿女一双人
 暗生毒汁害我身
 此人猜作八九分
 暗差僧鞋挑夫君
 信空降下大祸根
 哭坏单代受屈人
 剥你皮来抽你筋
 上吊又要一根绳

要保今日去寻死
 手指夫人高声骂
 员外打了好一会
 空人被打破陶哭
 且将十字收留住
 只打得那佳人浑身发青
 老员外只骂得如雷烈火
 只因你在此楼偷人快休
 那僧鞋和僧袜那里来的
 我与你何佛道真心苦修
 梁员外见鞋袜高声大骂
 快寻无常见闻君
 马屁逃夫你思听
 生下手来说死因
 跳在黄河洗不清
 再得十字救前因
 那佳人只打得哭诉冤情
 拳也打脚也踢就下无情
 叫我带屎来冲臭名难圆
 快之的来说去送你性命
 谁管你将和尚勾引我的
 骂一声单代女大胆贱人

四幅盖住梁子玉
 不知亲娘打去了
 狂风骤去生身因
 一连三阵狂风起
 就将夫人魂没去
 只因夫人办葷饭
 不表单代嚎啕哭
 千枝桃花一树生
 有娘的鸡儿跟娘走
 不比亲娘在世日
 晚娘耐房去煮饭
 四幅盖了女佳人
 留下一条八福裙
 吓你兄妹两个人
 佳人搬到地狱门
 夫人打下地狱门
 古佛降罪女佳人
 再表神差鬼使白
 都是我的妨娘生
 没娘的小鸡晒太阳
 未动开锅排保吞
 不能跪在灶角旁

缺打心肠叫软了
 倘若晚娘要打你
 取了人家贤得女
 取了人家贤得女
 比那若今夜寻了死
 一直来到花园内
 佳人哭得伤心处
 你娘一死也罢了
 可恨你父没道理
 可恨桃梅上天理
 叫声校儿不好了
 自然不打你当身
 双膝跪下叫娘亲
 怕的拷打你当身
 看那兄妹两个人
 你父必定取补房
 凉亭坐下教悲声
 手挽校儿一双人
 丢下校儿生非何人
 打娘又逼晚来寻
 生下毒汁害娘身
 你今要做没娘人

字老如夫同上 任
 若个个个个个个个
 有个患臣宗义成
 来子来子真来子
 姑娘正在为难处
 正是上天无路
 不分东西与南北
 不表子玉路上活
 二人路口分子手
 若能有个相会日
 急忙取玉遣裙子

踏过奔雷 上管万民
 一挂无儿冷清之
 来子无儿无女人
 来子添油送火人
 要想入地地无门
 那殿高底路不平
 表起小担担来金
 尼向东走妹西行
 只认宝贝不认人
 各分四幅带在身

我等逃难分手去
 哥之就把妹之叫
 离了自家门两扇
 当时二人无可奈
 时之刻之起反意
 桃梅生来心肠狠
 眉来眼去喜心上
 谁知父亲心肠狠
 员外子向消息事
 一日三来三日九
 兄妹当时无可奈

日台相逢要凭证
 妹之又把兄长称
 二人诉苦好伤心
 去做逃难(避)人
 日之来打兄妹们
 要害兄妹一双人
 言听计从在房中
 看之挑梅一介人
 苦好娘生西尔人
 不见亲娘转回程
 哭之啼之转家门

我母事只急得心中火起
 拜叫保办事草款符和尚
 我母事听得说与得心疼
 和尚知已了冲之大怒
 叫了好桃梅女去办茶席
 到门前敲木鱼 墓化茶汤
 和尚要和尚 未试拜母
 拜母来 求佛道 修心吃素
 我家中 有好好 为叫桃梅
 赛金女 听得说 连忙下拜
 抱瓦回 说明白 法界晓得

谁想和尚心哄骗我母
 谁知保志好心哄骗我母
 骂一声桃梅女大胆千人
 说我母假伴心欺了神灵
 准知已起坏心肉汤煮粉
 拜母事听得说发下善心
 看我母善吃素果有真心
 志动了 天上神来度善人
 提起她 这千人狗肺狼心
 尊一声老恩公叫我瓦回
 拜念你无投路带回家门

莫子是你晚娘 心肠太狠
 你果是走踏踏 迷失你家
 向女孩年幼小 所为何事
 宋老爷他也在 行善之人
 即老爷夫妻们 同有半佰
 宋老爷去在 从此经过

赛金女 苦上心
 你今幼小青年女
 忙把女孩搀起来
 只见小小一女子

每日向 打骂你 逃回家门
 你果是 前娘死 没得母亲
 为什么 苦伤心 眼泪纷纷
 见女孩 这苦 泪向瓦回
 既无儿 又无女 没得台根
 见路旁 小女童 大放悲声
 串民十字迂好人
 因何在此放悲声
 宋老爷细之问原因
 莫奔乱走放悲声
 吩咐庄户看原因

他与妹之分了手

刀割胆来筑穿心

不说赛金有下落

再说子玉小官人

要得兄妹来相会

杖履及第转家门

草桥笑上上上上

夫妻待女赛柔生

宗爷夫妻心欢喜

带了小姐一同行

10 姑娘听说忙下拜

恩父恩母叫连声

从此称我亲生女

我家带你长成成人

你今既然来逃难

果肯同我转家门

我今一庄无儿女

少了坟前化纸人

你今既是无投奔

有句话儿何可行

老爷夫妻生慈念

叫声小女听瓦因

小姐未成说完了

气坏了夫妻一双人

且将十字收留住

再将七字控前因

半路之与哥々

无投奔 甚伤心 啼哭悲声

如晚娘将兄妹

兄妹们无可奈 逃回家门

只说这区晚娘

谁想到心毒狠 来害我们

开母葬 被开父

那桃梅配开父 晚娘之人

到明天 看见她

就将母来杀死 定不饶情

我父事 听旁言

叫我母去寻死 早见阎君

我父事 听得说

佛慢台见僧鞋 仗仗为真

到南楼 哄开父

说开母 甚和尚教我父来

那开生 听计

何天僧鞋 买僧鞋 善佛堂 害我母来

子玉轿前拜四拜

又到轿后拜母亲

既然大人施仁德

即到轿下叫大人

子玉听说老爷话

收你为儿行不行

老夫一庄无儿子

进退无门即处行

既然你身逃难来

叫声孩儿你是听

11 老爷见他生得好

哭诉前因与后因

子玉见问那含泪

喊到轿前向家门

老爷忙把官人叫

眉看目秀一介人

啼哭真是一孩子

公平轿前看后因

老爷急忙向前看

悲切之痛人心

耳边听见哭悲声

老爷上住从此过

路过官堂向前行

夫妻同年有半百

未有香烟后代根

老爷为官多清正

圣旨升为御史身

正是相公慷慨哭

山阳知县十大人

子玉越想越是苦

末了救苦救难人

父来听略睡人的话

坐在路旁放悲声

娘被大风刮去了

管娘又害我二人

行一里来哭一里

不知死来不知生

急急忙忙任肯走

走一程来放悲声

好似半空下剑

恍如脚踏路不平

折断人向骨肉亲

折断人向骨肉亲

不在书中不交代
 三场已毕选好日
 看之二月初八到
 皇榜挂在衙门外
 元旦元宵却过了
 家之却把香未焚
 爆竹一声辞四岁
 拜过房师与主考
 开成报子他去了
 报到玉吏衙门内

子玉中举第一
 龙虎日成挂榜文
 带之沈笔入考门
 收拾公子跳龙门
 天下举子上京城
 当今开了大元门
 户之笙歌享太平
 梅花几桌又交春
 相公用心读书文
 同朝官员贺满门
 喜坏夫妻一妇人

大人与他纳了监
 相公长到十九岁
 正是日月如梭快
 老爷夫妻多欢喜
 梁子玉改小玉
 请了高才先生到
 大人各事停当
 拜过同朝渴过相
 次日朝王见了驾
 进了皇城门三座
 大人催动人扶起

顺天应试中举人
 满腹文章无比论
 光阴似箭往前行
 公子孝顺二双亲
 过目成章件件能
 教训子玉读书文
 即作家人清先生
 放告莫卯礼来行
 退朝上任进衙门
 安排家眷住下身
 晚宿晚行到子家

收养儿有十年正
 只说养儿防身老
 父母所流双流泪
 今日暂别双父母
 心今回家将仇报
 林元谢恩将朝拜
 万岁推了他何本
 忙连奏与万岁主
 一家被他来拆散
 恨他不足别一个
 游街三日方已毕

把我女儿当亲生
 费了爷娘一片心
 叫声娇儿听元因
 伸冤回来奉双亲
 访寻妹之与母亲
 回衙告知继父亲
 奉旨祭祖把冤伸
 家有母亲受冤情
 事到如今记在心
 只恨挑梅小贼人
 想起家中大事暗

林元及第牌两扇
 铜锣打得仓仓响
 前有儿班带纱帽
 林元放安上了马
 吩咐一声来开道
 林元又领皇圣旨
 又到后官朝国母
 君王赐了三杯酒
 状元就是梁子玉
 三月三日皇登殿

江新白马多威风
 板子拖得一条声
 后有儿班带红缨
 执事瑞气往前行
 两旁呼喚一条声
 游街三日看皇城
 丈二红绫挂顶门
 亲手搀起小俊亲
 一奉成名天下闻
 立刻乘英状元身

14
赛金正坐高楼上
听得上横放枪声

二堂气坏李老爷
惊动后楼小千金

焦耐李耐都不合
气坏李爷一个人

耐夫回言我不合
又叫李耐又不能

急忙又把耐师叫
龙碑面汤必先成

14
字字听说忙答应
只要龙碑面汤下程

状元回言不要紧
急忙忙送点心

宋爷向前将空向
步入公馆坐安身

状元岂头下了马
宗爷跪接公馆门

只见挂灯又结彩
到了草桥大关门

行程正是三春景

州官接来县官迎

逢洲自有州官接

吩咐执事往前走

状元说罢含泪别

爷娘不必心焦向

如去不过三四月

父母要加宽心放

情腹尚且知礼意

与鸭还有白哺日

只说十家有台

一言风光爱杀人

州县官员忙不停

过县自有县官迎

直奔家乡路上行

拜别二老就动身

孩儿不忘抚养恩

赶早回来奉双亲

儿是知恩报德人

人不知恩不如禽

牛羊还知喂乳恩

谁知弄下二老人

15
父亲且到后堂去
儿到耐房办现成

不是七儿夸大口
此面女儿能办成

你女去做什么事
为个龙须面当真心

赛金所说这句话
叫声父亲听反因

只因你是裙钗女
叫你难说不能行

15
我儿若是男子汉
为父与你计较行

没个龙须面也罢
丢官是小命难保

办做耐子总不合
活个难杀老年人

叫到佳耐师架舍
叫李耐师他不能

百味珍着他不吃
只要龙须面来吞

清之白之家中坐
来了新科状元身

你不向来说不说
说去根由恼杀人

字爷开口叫女儿
今日不必把礼行

有话说与女儿听
做了消愁解闷人

为什事来流眼泪
二堂上面放悲声

上前几步行过礼
万福父亲口内称

一见父亲双流泪
忙向前来向瓦因

转弯抹角来得快
二堂早在面前存

头上乌云正一正
足下弓鞋登一登

不梳头来不洗脸
随身衣服下楼内

不知啼哭因何事
要下楼去看分明

高哭好是我恩父
低哭又象抚养人

下在锅内因之转
 姑娘一见面水汤
 一拖西把烧干
 点起南方丙丁火
 洗之锅来翻上水
 粗是酥眉油是线
 先切龙头后切尾
 切他一个子须日
 打来打去刘成美
 太祖玉棒拿在手
 霸王将顶来拳起

云中龙戏各中
 龙面下在水面上
 三拖回把滚之汤
 益良胡卢致亮光
 炳炸门口抱柴王
 条之内边洒沙糖
 龙爪切得一样长
 擂鼓三咚新蔡阳
 跌来跌去沈比山
 打他光武闹昆阳
 放在时飞肉案上

翻志北方王鬼水
 罗巨把起薛仁贵
 磨子磨得粉之碎
 社之播之巧三姐
 九月十月成下去
 小麦佳来面皮黄
 下之样内厨房进
 上提拜身换衣服
 说罢老爷他去了
 女儿能必龙须面
 父亲听说心欢喜

三霜清候闹昆阳
 例包家黑鸟盆
 甲在筛得白如霜
 磨房受苦李三娘
 五月六月收上场
 五谷之中他为强
 顺代几句古人名
 调衣脱去换布裙
 小姐回转向楼门
 为父致下一条心
 女儿真正手段能

定老爷听得说 回言便答
 向老爷 这女儿 果是乖臣
 到不如 即到向 来污妹子
 新状元吃龙面 想起好苦
 若英官忙跪下 禀告大人
 新状元此时向 心中又想
 到不如 在此向 泪之污向
 并思：何想之 心中思想
 我嫌来 学会做 无佳之宝
 想当初 巨龙面 婆之合做
 新状元 见龙面 心中思想

叫一声新状元 叫我未闻
 或抱的 或拾的 说与我听
 将英官 来叫出 泪向瓦因
 想好了 兄妹们 唧唧声声
 这龙面 是我女 亲手做成
 这龙面 哪方人 亲手做成
 若污到 来妹子 同转家门
 莫不是 这女子 是我妹身
 到后来 又传与 妹之赛金
 这巧手 只传与 我的母亲
 猛想起 生身母 养身母亲

新状元 吃龙面
 状元见了龙须面
 就把龙面来送上
 老爷捧了龙须面
 状元看见龙须面
 开口便把父亲叫
 不累子怀来得快
 快走又怕慢
 何仙姑托盘拿手
 先盛龙头后盛尾
 抄排风早溜拿在手

卓成十字想前情
 想起开怀喂乳娘
 一房伺候状元身
 送到龙棚里也存
 便知龙面泪掺情
 龙面快送状元身
 二堂早到面前存
 快走又怕冷
 顺带象牙筷一双
 四爪搭在碗边
 盛在刘龙碗中

18.

父姓什来母姓何
家住何州并何县
状元听说忙开口
姑娘听说忙回答
先官是你亲生父
老爷说罢他去了
梁是胡椒放多了
你做龙面状元吃
字爷见向忙开口
父亲叫儿有何事
小姐来到前厅上

姑娘叫了什么名
根本家乡哪里人
叫声姑娘听原因
他是我伯父父亲
还是你伯父父亲
状元开口把话论
麻得状元泪淋淋
状元斗然泪纷纷
便叫女儿叫一声
你把事情说我所
女儿便把父亲称

且将十字收留住 再得七字接前因

到对姑娘 说个明白
宝爷听得说 连忙开口
新说 听此言 开言便叫
这孩 拜我子 为我义女
我妻子 听此言 报若不急
兄妹们 无可奈 逃回家门
那桃梅 到台来 配他父亲
那女孩 见我回 说西真情
那女子 哭诉得 实在伤心
与那日 奉圣旨 高美上住

叫儿你 和史女 听我原因
我请保 叫你女 来见我身
我夫妇 喜爱她 尤如亲生
我心疼 将女孩 带回家门
半路上 分离了 永无依因
每日间 打骂他 兄妹二人
说心被 桃梅害 死去无葬
便得那 女儿事 向那原因
见路旁 有女子 哭诉声音

19.

来娘不分无可奈
寻到僧鞋与僧袜
父亲便了他的活
仇人又把父亲捉
可恨桃梅生反计
不过打他三五下
僧人说罢他去了
一日佛爷知道了
贫道本是胎的素
却被僧人贱得了
可恨瞎人信天理

只得无常入西门
苦打来娘一个人
来娘房里去我寻
谎言巧语哄父亲
瞎甚僧鞋害母亲
结下仇来似海深
气坏来娘打贱人
打入地狱十八层
开我斋来罪不轻
骂奴开怀喂乱人
草锅汤做待僧人

我娘打我桃梅女
不化金来不化银
那日来了和尚
不吃着鱼池内水
我嫌吃的胎里素
兄长名叫梁子玉
来生三男和四女
父亲名叫梁宗勉

煮些饭菜斋僧人
化粮素食好动身
坐在门前念经文
不吃荤锅煮的汤
求吃常斋不开荤
奴佳名字叫赛金
只生兄妹一双人
母亲单代女贤人

家住蔡州青阳县
三官殿前梁家村
不是我名无姓人
大人在上听原因

他说与妹之分手 要我妹之回家行

我在半路收马童
要是你哥见了你
再言便抱姑娘叫
只说他是所一个
状元听说这番话
这是我叔真情活
龙面本是开办的
状元大人此 过
持奴带到革关止
夫妻一身无儿女
小奴哭倒路旁也
名家也叫子玉身
你果认得他当身
叫声姑娘听瓦因
谁知是我妹之身
心中不却吃一痛
并无流言哄大人
忘求大人怒小生
还要龙面当真心
抚着奴住十年春
收了奴住当亲生
来之恩人宗义成

三叉路口分之手
每人带个裙四幅
兄妹二人无可奈
贱人当时又生计
兄妹二人回家转
四幅盖了奴兄长
不知亲娘即去了
兄妹二人抬头看
谁知斗然狂风起
母子哭得进花园内
一手挽了奴兄长
不知哥之何方存
日台相良作证凭
共做逃难离家门
思量斩草又除根
卿知挑梅伴父亲
四幅盖了奴身
留下一条八幅裙
不见开怀喂乳人
亲娘刮去无影形
照样将打鼓三更
一手挽了开当身

听尔南楼好做诗
淮在东楼学文字
家中房屋有脚少
既是兄长梁子玉
寒金又抱大人叫
叫声妹之认了我
昨是娶把龙面吃
我今行了多日久
你兄中举举一后
就在他家将书读
把我带到他家去
淮在北楼念经文
淮在西楼绣针云
几坐楼房几扇门
我把家事向大人
我有言语你是听
一同回家祭祖坟
昨晚妹之在此存
路过草桥高关门
特意回家报仇恨
身一开孝跳龙门
过继为子当亲生

我在官塘来啼哭
当日见妹分之手
状元听说开言包
若还又亲知迎了
枉读诗书无礼议
寒金听说红了脸
姑娘单见你兄长
状元听了忙回答
你叫哥之来到此
小姐听说这句话
迁到愚公十大人
你兄啼哭向北行
叫声妹之你是听
你向鸟沙戴不成
冒认哥之罪不轻
骂声状元不正经
兄长在你面前存
便把姑娘叫一声
我在这里合他身
听声状元听瓦因

还有一个三舅之
 大舅名字叫什么
 外公九十几岁死
 家中事情已明白
 赛金听说大人话
 这是家中一番话
 正西有尔八角井
 青龙池内土地庙
 花园有座三官殿
 五排柳上扣鞦韆
 前门栽了五排柳

众人定他什么名
 二舅叫尔什么名
 谱之几十见周君
 初今家中向一向
 一字不差半毫分
 清问妹之架是真
 东北有尔养鱼塘
 西北角上碾坊开
 母亲日夜把香焚
 牛羊扣在桑树存
 五排桑树在后门

为见拿林学文章
 父事前楼楼吃泥
 前台四十九间房
 别的等情不晓得
 子玉又将妹之叫
 说不莫来对不真
 说得真对得真
 这是家中一番话
 脚踏有尔土地庙
 东西巷口有何物
 门前栽了五排柳

小林西楼绣针云
 母亲台楼念经文
 四处堂楼皮四方
 家中一切我知情
 叫声妹之你是听
 你是为条犯法人
 我有同胞某乳人
 清白新科状元身
 何处有尔养鱼塘
 大府门朝哪一方
 后门又栽几排桑

什么孩子吊的礼
 正帖敲来白帖敲
 哪个前未哪尔裁
 还是罗来还是少
 别的事儿不问你
 心中又想一件事
 赛金听之他的活
 礼为不讲母亲名
 我因本是隔胎生
 还有一个三舅母
 大舅取白冯代古

什么带子定两根
 什么腰来什么裙
 哪个巧手巧做成
 谁人讨帐带回程
 八幅罗裙向大人
 又问大人说及因
 一莫不差半毫分
 妹之龙棚大顶真
 花名叫做单素贞
 至今未成取过门
 二舅定的李家人

家中还有三舅之
 大舅名字叫单代
 外公八十三岁死
 别的事件不知边
 状员又将妹之叫
 如若一字对不准
 这是外公家的事
 亲娘排行几胎生
 还有一个三舅母
 大舅取的哪家女

混也王来是外名
 单素贞是我二舅名
 外道七十二岁死
 外公家事记得真
 叫声妹之所真情
 你是犯法逮杀人
 清你状员说我所
 花名叫做什么名
 至今果成过门庭
 二舅取的哪家人

兄弟龙棚来对宝
 忙把裙子穿在手
 急忙走上高梯去
 小姐看见裙幅幅
 没有亲娘裙幅幅
 妹之也取无何面
 伸手取西裙幅幅
 妹之若是子相俊
 三叉路口分了手
 只因母亲受了屈
 父亲四十能寿辰

不见亲娘一个人
 来到龙棚对宝珍
 也取亲娘四幅裙
 龙如拾到一方金
 就是仙人也不认
 才俊同胞共乳人
 放在桌上来对证
 取西亲娘裙宝珍
 一别之时到如今
 八幅罗裙两各分
 母亲穿了迎亲的

上有五百两银子
 银子银子早的礼
 不是正怕反反敌
 寡母前来新报裁
 不是男来不是女
 别的事情不知道
 子玉听说这番话
 若是一字对不准
 这是罗裙一段话
 准人四十花寿送
 上有多少环铃子

八条裙带顺风迎
 粉江带子定西样
 上头连的是白滚
 妹之巧手巧做成
 父亲讨帐带回程
 八幅裙料记得真
 妹之做事太认真
 怕怕太女也不认
 清大人说反因
 卿尔来了迎亲的
 几对裙带顺风的

六月里天气热
 为着你苦命孩
 心肝时年七岁
 我念你小女孩
 你病那冤和苦
 想那日春空旨
 宋老爷泪洒之
 我女同哥回家去
 老爷听说这一声
 女儿不是付义人

儿西豆症
 尤如命根
 到我家
 没处投奔
 年记幼少
 生致与我
 你说的这些话
 苦路上遇见了
 苦命孩

老在重为的你
 费尽我老妻的心
 为父的抚养你
 正苦十年
 万苦十年
 正苦十年
 万苦十年

恩父恩母放宽心
 祭过祖先再回程
 他与奴佳一母生
 报与恩父恩母亲
 转离抹角到申厅
 回来与你一同行
 叫声哥之听反因
 还在在此奉双亲
 忙把妹之叫出声
 拜谢天地与神人
 谁知枯木又逢春

时间不过三五日
 你女与他回家转
 新科状元初为官人
 赛金双膝来跪下
 小姐说罢他去
 等我告知双父母
 赛金听罢哥之说
 还是同我回家转
 新科状元梨子玉
 状元大人忙跪下
 只说不得来相会

26
 我儿同开回家去
 义成听了囊金说
 日台爹娘归西去
 二次还到高关上
 我同兄长回家去
 理之智福陀跪下
 姑娘听了一番话
 今日我儿回去了
 钢刀割去心上肉
 摸上摸下疼死我
 采上摸摸青绿发
 为父言活要
 叫声乖之小娘性
 儿做披麻带孝人
 服侍爹娘二双亲
 一同回家祭坟
 万福爹娘口内称
 两眼不住泪淋淋
 不知回程不回程
 箭射肝肠满肚疼
 难舍我儿离我身
 身上摸之好衣巾

肚肠出来肚肠生
 口咬尿管空费力
 鸟鸡还有反哺日
 今日我儿回家去
 古人言活说得好
 后来生个小孩儿
 只说抚养你成人
 神堂各处去还愿
 涉满豆豉一百天
 肉上生肉菜又菜
 竹笠打水一场空
 小羊吃乳跪埃坐
 不可忘了二老人
 有假儿来没假孙
 外孙给我烧纸文
 招房女婿到进门
 大香大烛谢神明
 脚板着地才放心
 老妻为保吃草受苦
 若夫为病不大要紧
 幼孩儿甚微及义之人
 慢哉有言也

27
 不表员外心中苦
 今日我的儿七到
 员外此时心欢喜
 二人连忙来跪下
 兄妹来到大厅上
 状元吟咐众人马
 在跨行程来得快
 逢山不看山中景
 状元发功人和马
 不表夫妻心中苦
 夫妻二人来相送
 再表林元一个人
 不见同床同枕人
 自思当年大服心
 许说分离一段情
 清画生身老父亲
 大炮三声入府门
 早到青田梁家村
 与水不看取鱼人
 一路鸿之向前行
 再表兄妹两个人
 站在门前泪淋淋

为表现在差你走
 我儿今日回家去
 母亲听说这句话
 小姐来到高楼上
 不表宗爷心悲切
 你到后楼辞你母
 这是为父心里活
 为父今日拜托你
 若是父亲不在世
 要是母亲不在世
 下次从你高关过
 表之你母一片心
 不知何日转回程
 心中难舍我儿身
 告诉母亲得知情
 再表小姐上楼门
 收拾用物带功身
 审之切之记在心
 也看抚养一片心
 买刀毛围止上坟
 办酒接待我儿身
 一定要到那衙门

28

用了桃梅借祭你
老僧下凡去度你
佛爷就犯单你叫
因见兄妹诚心大
梁子玉与小赛金
一连四十九天过
全城官员来吊孝
急忙开丧来守孝
不表桃梅报老话
把地拖在荒郊地
祭过一场方已毕

应该打入地狱内
另怪你身不出心
你今前来看原因
地府提去老安人
孝心愿动佛世心
子玉守孝已完成
亲戚邻居总上城
清个什么念经文
再说杖元考心人
狼吞狗咬活报立
忙把尸首送出门

吩咐扒出桃梅心
不表一家来悲苦
父子兄妹放声哭
就犯桃梅来绑起
内外大斤挂了孝
中勉当时来吩咐
员外听了才明白
桃梅拷打忍不住
喝叫手下快动手
林元急忙传下令

前束祭祝老母亲
再表杖元一个儿
兄妹只哭苦娘亲
供在灵前活祭人
中堂改做法场门
安排殿坐供安人
咬牙切齿恨妖精
只得招去陪官情
用刑拷打不容情
台堂硬去黑心人

29

君王唯了子玉本
伏望拜三洪恩大
一表叫做宋洪洪
小臣又有一道本
又奏母亲还魂转
次日五鼓朝王驾
在路行程来得快
西府放了三声炮
赛金在家待奉母
元外安人不肯去
拜罢祖坟回府内
此时全家团圆令

吟赠宗十二大人
普发恩论与二臣
一个就是十大人
表奏恩深意重人
柳仗皇上雨露恩
秦明报仇一段情
早到皇城一座城
人马来路上路行
杖元上京交旨文
同在佛堂苦修心
子玉收拾祭祖坟
一家收拾祭祖坟

一家哭罢方了了
多亏老天来保在
我只说今世不相见
宗勉一见来妻子
丫环见了忆通报
霹力一声惊天响
一阵香风来得快
佛爷就把揭席唤
皮人当时称多谢
念保儿女多行善

忙摆香案谢神用人
一家骨肉又相逢
谁知枯木又逢春
上前抱住放悲声
合家老小来看明
安人送入佛堂内
早到深家北楼内
相送安人转家门
谢之两天大神人
夜夜回拜念心人

收香收烛收纸马
 世人在世行正道
 劝人在世要行善
 劝人在世不学好
 劝人学好有好处
 奉劝世人要学好
 此书老叫分福记
 三家六老登大寿
 赛金也配名家子
 一子迷了十家
 子玉取了名家女


收纳钱帛转天门
 子之孙之发万金
 莫学五逆不孝人
 到老终身没后咸
 生下儿女高官升
 莫学桃梅黑心人
 龙颜面传到如今
 共收朝庭雨露恩
 连科及第入朝门
 祭礼手担报深恩
 连生五子能全

三家同住在一块
 不爷辞朝告了老
 赛金山姐来叩见
 会见安人和员外
 夫人当时来收拾
 草桥关爷得了报
 一直来到御史府
 林元当时将恩谢
 小大人称为御史照
 林元钦授学士职
 子玉生父与生母

大团圆在梁家村
 子玉孝养转家门
 晨昏服侍胜亲生
 拜谢宗爷留女恩
 双双同到梁家村
 不愿为官管万民
 继父父子又相逢
 退后三步出朝门
 议成升为太岁名
 伴读太子内官门
 恩封一品在家门

送友靴
 沈瑞制所
 此书要悉心

一九九三年三月和五日抄



中国地方劇の越境

— 江蘇如皋童子戲の三種類の表現形態 —

上 田 望

1. 問題意識

江蘇省如皋地区に伝承される童子戲は、儼戲としての宗教儀礼を維持する一方、演劇としての「通劇」や詩讚体説唱にも発展し、1990年代以降、儀礼・演劇・説唱の種々相が混在しながら活発な活動を展開している。演劇発生の起源が祭祀儀礼にあることは田仲一成氏の祭祀演劇理論ですでに広く知られているが、このように各段階の演出が同じ地域で多くの童子（上演者）や劇団によって繰り広げられている事例は珍しく、演劇史や芸能史研究においても非常に興味深い研究対象と言える。

本論文では、以下のような問題意識とアプローチで、具体的な事例を紹介しながら考察をおこなっていくことにしたい。

- 1) 現地調査によって収集した童子戲の諸脚本を電子化し、テキストをN-gramなどの手法を用いて計量的に解析し、そこから童子や観客たちの宗教観念、世界観を探る。
- 2) 童子戲の演劇、説唱は豊富な劇目、演目を持っているが、それらはどのようにして創作されたのか、そして如皋地区の童子戲は一体どこから伝わって来たのかという問題を、童子の口碑や音楽、脚本、儀礼の様式などいくつかの側面から考察する。

2. 江蘇省如皋童子戲の三種の表現形態

最初に筆者が調査を実施した如皋とはどのような街なのか、簡単にその地理的環境、歴史の変遷と現況を見ておく¹。

如皋市は長江下流の北岸に位置する歴史的、文化的に由緒ある城市であり、隋代に創建された定慧禪寺や清初の文人冒襄の故居、水絵園など名勝古跡も少なくない。如皋市南端の一部地域は長江に接しており、そこから海にも近く、長江を隔てて南岸にある上海や蘇州、無錫などの大都市へも長距離バスとフェリーを乗り継いで2～3時間でこれらの都市に到達できるなど、アクセスのよい場所と言えるであろう。

如皋の行政区画の歴史を繙くと、この地が如皋県に昇格してから現在に至るまで、1590年の歴史がある。西周時代、この地は海陽と呼ばれ、東晋安帝の義熙7年（411）に如皋県が初めて置かれることとなった。唐は海陵県の如皋鎮としたが、五代には県に戻り、泰州に属した。宋は淮南東路に、元では揚州路泰州、明では南直隸揚州府に属し、清に入ると雍正2年（1724）に通州が直隸州となり、如皋県はその直轄下に入った。清が滅んでもしばらく如皋県のままであったが、1940年、南北を走る運河を境に東西に如皋と如西の2県

¹ 如皋市の沿革については『江蘇省如皋縣志』（清楊受廷他修 馬汝舟他纂 據清嘉慶13年刊本影印本、臺灣成文出版社、1970、『中國方志叢書・華中地方』所収）、『如皋縣志』（江蘇省如皋市地方志編纂委員會編、香港新亞洲出版社有限公司、1995）、『如皋市交通旅游図』（山東地圖出版社、2003年版と2004年版）を参照した。

に分割された（1945年、如西が如皋県、如皋が如東県と改名された）。

1949年以降、南通地区（市）に属することになり、1991年に県から市に昇格するが、現在も南通市の管轄下にある県級の市である。2004年の時点で人口は146万人、市下の鎮は23を数える。

そもそも童子戯とはどのようなものなのであろうか。「童子戯」として最初に脚光を浴びたのは如皋童子戯ではなく、隣の南通市の童子戯であり、車錫倫・金鑫・殷儀三氏、沈志冲・呉周翔両氏、曹琳氏、田仲一成氏らの先駆的で詳細な調査・研究がある²。

車氏は、南通県西北部及び如皋、如東県近隣地区の童子活動を調査し、これらの地域に伝わるある種の迷信活動に従事する人々が「童子」と呼ばれ、彼らが執り行う消災降福、驅鬼治病の「太平会」で演唱される歌舞、演劇などの伎芸が民衆に「童子戯」と呼ばれるとし、これはまさに童子、童子戯の定義となるであろう。車氏の研究は、童子の性格と伝承形態、童子戯の起源、そして太平会での個々の儀礼について紹介と分析がなされており、童子戯研究に先鞭を着けたという意味でも大きな意義を持つ³。続いて発表された沈志冲・呉周翔両氏の資料は、南通童子戯の儀式の文句及び「坐堂審替」の脚本を整理、収録しており、車氏らの研究を資料面で補完する。

曹琳氏にはフィールドワークに基づき南通県の童子の祭祀組織や儀礼、童子の家系（胡氏）と伝承形態について考察した論文があるが、同氏はさらにそれらを発展させ、儀礼の程式や科儀書、南通童子戯のテキスト「十三本半巫書」などをも網羅する著書を出しており、資料的価値も極めて高い。

また田仲一成氏は1989年と1990年の2回、やはり南通で現地調査を実施され、克明に儀礼を記録しその一つ一つの儀礼の意味を道教儀礼や演劇史の文脈から分析、説明されている。そして南通の童子戯を閩南の童乩の要素、紅頭法師の要素を併せもつ巫術儀礼として荊楚文化圏の基層文化の驅邪押煞の儺礼に位置づけ、古い時代には仮面の演出も有していた筈であるとする。また、南通童子の消災会については、単なる驅邪押煞の巫術ではなく、孤魂超度に重点を移した「建醮儀礼」に近いが、道士儀礼のように整った形ではなく、紅頭法師の建醮の段階を反映するものであろうとする見解は、如皋童子戯の性質について考えていく上で示唆に富む。

² 南通童子戯の研究は以下の文献を参考にした。車錫倫・金鑫・殷儀三氏「江蘇南通的童子会和太平会」（『東南文化』総71期，1989 ※この資料は田仲一成氏よりご恵投いただいた）、沈志冲・呉周翔搜集『童子会資料』（『民間文芸季刊』89-3，1989）、曹琳「江海平原上的古儺余風—南通童子祭祀活動概覽—」（『民俗曲芸』第70期，1991）、曹琳「覲教傳人—南通童子胡錫蘋」（『民俗曲芸』第117期，1999）、田仲一成「江蘇省南通県の童子戯」（田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会，1993）第2章 pp851-944）、曹琳『江蘇省通州市横港郷北店村胡氏上童子儀式』（施合鄭民俗文化基金会，1995，民俗曲芸叢書所収）、『江蘇省南通市閩東郷公園村漢人的免災勝会』（施合鄭民俗文化基金会，1996，民俗曲芸叢書所収）、『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』（施合鄭民俗文化基金会，2000，民俗曲芸叢書所収）を参照。

³ 車氏はその後、江蘇北部や安徽などに跨って見られる「香火神会」という民俗文化活動の中に童子戯を位置づけており、童子戯の誕生と変遷を考える上で興味深い。「江蘇北部的香火神会、神書和“香火戲”（提綱）」（『信仰・教化・娛樂—中国宝卷研究及其他』所収，臺北學生書局，2002）参照。

次に如皋童子戯の代表的な事例を、1) 祭祀儀礼、2) 演劇(通劇)、3) 演唱について、それぞれ見ていきたい。

1) 李徳宗氏の童子戯の儀礼

時間：2006年2月15日 12:05～17:05 (13:20～14:50は休憩)

場所：江蘇省如皋市東陳鎮洪橋居委会林昌宏家 N32° 24' 19.8" E120° 38' 19.9"

上演者：李徳宗

上演演目：「開壇」ほか童子戯の儀礼のみ

会首名：林昌宏

目的：身内の消災

備考：李徳宗氏が10:10に到着。榜文などは全て事前に書き上げられていたが、祭壇など飾り付けの準備に2時間近くかかる。会首林昌宏氏に拠れば、息子や息子の嫁が交通事故に遭ったりけがをするなどよくないことが続いたため、占い師にみてもらったところ、3年続けて童子戯を呼ぶようにと言われ、昨年から李徳宗氏を招き、今回が2回目であるとのことだった。謝礼は1回、120元ということである。主たる参加者は林昌宏氏とその夫人、息子の嫁の父親計3名、あとは数名の親戚がちょっと立ち寄る程度。なお、身体を刀で傷つけて出血させる神霊降臨の儀礼も行われる筈であったが、会首が反対したため執り行われなかった。

曹琳氏、田仲氏などの先行研究に基づけば、南通童子戯の上演の場は以下の2つに分かれる。すなわち郷儺の系統に属し、定期的・集団的で規模の大きい「童子做会」と、堂儺の系統に属し個人が消災などの目的で行う「童子上聖」である。この分類は、如皋の童子戯についてもほぼ当てはまると思われるが、田仲氏が1990年に調査されたような3日にわたる大規模なものは如皋北部では殆ど舉行されないようである。

如皋の場合、この2年間で調査したものの中で、最も堂儺系統に近いのがこの李徳宗氏の儀礼である。李徳宗氏は、「唱書」は一切やらず、童子として儀礼を執り行う儀礼専門の巫師と言えるであろう。

事実、請神の儀礼のために準備される祭器、神像、対聯の数は南通の太平会に比べれば少ないものの、筆者が今まで見てきた中では圧倒的に多い。壁に張り出される榜文についても正榜、副榜、献榜など5帖もあった。この儀礼の目的(消災)がわかる副榜を以下に挙げておく。

修設神壇伏爲 敬祝三界洪門太平財源土地鎮宅勝會乙所 洪山堂法司叩 依教奉行遵先賢之教、岳府之科 亘古至今 天地寫遠恕凡民開罪 今撻南瞻部洲 中華人民共和國 江蘇省如皋市管轄 東陳鎮洪橋居十五組人士 居住當坊土地福德正神界下 奉聖會首人 林昌宏 愛妻○○○ 兒○○ 媳○○○ 孫○○叩
泊家眷人等是日上午 鴻造俱情 伏爲投詞 擇選良辰入市買辦 金錢紙馬 明燭寶香 上素下葷 茶糖果品 酒禮三牲 供獻之物 有勞三界符官即遞 外懸神旗 內張榜文 三表三牒 奏請三天門下 請神赴會 收納香灯 大獻完滿 駕回天宮 祈求會首丁財兩旺 祈求會首人口太平 祈求會首添福添壽 祈求會首子孫興旺 祈求會首人宅兩旺 祈求會首永無災患 祈求會首財源廣進 祈求會首萬事順利 右干 丙戌年正月十八日呈榜文神前張掛

示行

また南通のように鶏を殺す「開光」の儀礼はなかったものの、師刀を用いて腕を傷つける憑依の儀礼も行うことができるようである。このほか、南通の童子戯は「孤魂」の神位や「孤牌」、「孤魂堂」を設けるなど、田仲氏が指摘されているように「孤魂超度に重点を移した建醮儀礼」の性格が濃いのが、今までの調査では如皋の童子戯にはこのような要素は見あたらなかった。

彼の帳簿を見せてもらおうと、向こう4月までぎっしりとスケジュールが詰まっており、顧客は主に東陳鎮など如皋市北部、東部の近くの鎮の在住者であるが、隣県にも顧客がおり、しかも彼らの多くは林昌宏氏のように何年も彼に依頼しているリピーターであった。これは如皋では童子による儀礼の需要が今なお多いことを如実に示している。

なお、李徳宗氏の師匠は海安市丁所郷陳莊村の田井雲氏であり、如皋童子戯と南通童子戯の関係を考える上でもなかなか興味深い。

2) 楊斌通劇団の演劇と儀礼

時間：2006年2月14日 7:15～9:48

場所：如皋市如城鎮大殷村 23 組

N32° 23' 43.6" E120° 35' 34.4"

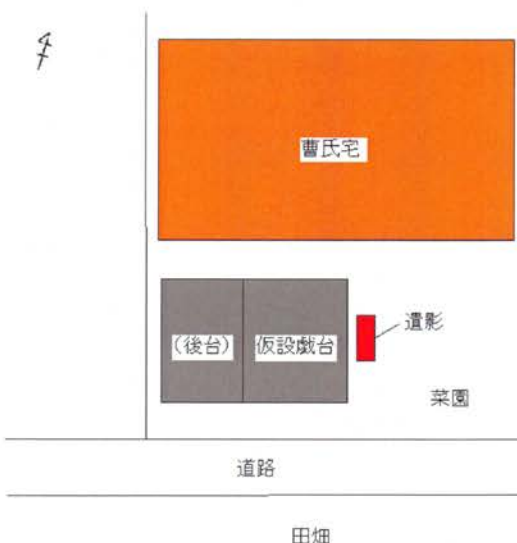
上演者：楊斌通劇団

上演演目：「劉文龍求官」

会首名：曹保付、曹保鳳

目的：父親の十回忌

備考：父親である曹玉龍の10回忌のために息子の曹保付と娘の曹保鳳一座を呼んだということで、仮設戲台のすぐ手前に置かれた卓の上には、亡くなった両親の遺影とお供物がそなえられていた。当日はあいにく途中から雨となったが観客は30名程度。



楊斌通劇団は4度、その上演を観察しているが、通常は通劇の上演しかおこなわず、童

子として儀礼を行ったケースは一度だけであった。その際は一座の馬坤氏が童子をつとめていた。馬氏は法冠・法裙を着用し、祭壇には三界神の神像（菩薩軸とも呼ばれ、上界の玉皇大帝、中界の東嶽大帝、下界の地藏王）を掛け、十八の菩薩紙（神位）を並べて開壇の儀式を行っている。榜文は以下のようなものである。

啟建榜文神壇一所 奏為 宣古傳流 俯以今據 南瞻部部 江蘇省如皋市 治下 東陳鄉 杭橋村 四組 都圖甲 人氏地名 杭橋村 本坊土地 界下居住 信士會首 入市採辦 金錢紙馬 明燭寶香 全豬一口 浪跳龍魚 鳴雞鳳鴨 茶糖果品 上素下葷 酒禮三牲 巫人奏請 三界之神 三表三帖 三天門下 法鼓三咚 申奏公文 祈保會首 在會人等 人口平安 血財興旺 田禾茂盛 五穀豐登 生意興隆 萬事如意 乙酉年 七月二十五日給勝會一堂 眾姓人等 （有八位姓名 略）洪山堂 法司巫人 馬坤 榜文張掛示行

楊斌氏はインタビューで、「開壇」などの儀礼を行うかどうかは顧客次第であり、人が亡くなったときには僧侶と共同でやることがあると答えている。まただいぶ昔に亡くなった祖先の祭祀や老人の誕生祝いなど慶事の場合、儀礼は普通行わないとしている。

3) 夏伯銀、冒建華氏の演唱

時間：2005年8月27日 8:40～11:30

場所：如皋市東陳鎮山河村13組土地廟

N32° 25' 16.5" E120° 37' 28.4"

上演者：夏伯銀、冒建華

上演演目：「九郎官請神」「発表」「送駕」

会首名：本土地廟所轄の村民

目的：土地会

備考：無し。

夏伯銀氏（男性、61歳）、冒建華氏（女性、37歳）については、筆者はその童子戯のキャリアや習得過程について研究協力者を通じて詳しいインタビューをおこなっている。夏伯銀氏については4箇所、冒建華氏については5箇所での「表演」を調査しているが、二人ともキャリアが浅いという所為もあるのか、童子戯の宗教性が薄く、上記のケースのように土地廟などで簡単な儀式を執り行うものの、法裙などの装束を身につけることもない。また冒建華氏は女性であるということが関係しているのか、夏伯銀氏や別の童子である許逢銀氏のサポート役について儀礼時の伴奏をするか、儀礼の後の唱書を担当するのみである。夏伯銀氏や冒建華氏は唱書用の多くの唱本を所蔵しており、彼らは唱書に特化した芸人の性格が強い。

3. 童子戯の唱本と音楽

演じられるレパートリーであるが、舞台での上演を主とする楊斌氏の場合、舞台化粧をして演じられるものは二十数種類と答えており、実際今までも彼らの出し物で同じものを

観たことはなく、レパートリーは少なくない。また、唱書の場合はどれだけ蔵書（抄本など）を持っているかがレパートリーの数に直結すると思われるが、夏氏の場合は数十種を自宅に所蔵し、冒氏も本を見て唱わないにせよ十数種の抄本をカバンに入れて持ち歩いている。

夏、冒氏のレパートリーの中で南通の童子戯「十三本半巫書」と重複する内容のものもあるが、如皋の童子戯には説唐物、楊家将物、乾隆帝物なども多くあり、これらの題材がどこからやってきたのか、どのように成立したのかは今後の調査と研究に待ちたい。

また楊斌通劇団も多くのレパートリーを有することは前に述べたが、南通の「十三本半巫書」とは関わりのない「陳英売水」、「劉文龍」、「蔡伯喈」、「珍珠塔」などが上演される機会が多い。これらの作品は江南では有名で、芝居や芸能で繰り返しリメイクされているものであるが、何れも男女の別離や貞節、苦難の道行きなど構造的に似通ったものばかりである。田仲一成氏は南通の童子戯の祭壇に孟姜女、趙五娘（琵琶記）黄桂香、祝英台、蕭素貞（劉文龍）の5人の烈女の像が作られていたことから「郷民が孤魂烈女を特に重視していたことの反映」とするが⁴、実際に如皋ではその烈女に対応した作品が民衆に好まれ、頻繁に上演されることは江南の基層文化を考える上で大変興味深い。

次に、南通の「十三本半巫書」の中から「魏九郎替父請神」（九郎替父、九郎請神、進出朝、出朝などの呼び方もある、以下、南通本）を選び、同じ内容を持つ如皋の「魏九榮出世」と簡単に比較し、どのような点が異なるのか考察する。

大筋は、如皋の夏伯銀抄本（以下、如皋本）の「魏九榮出世」も同じであるが、主な異同は、

i) 登場人物名、地名の違い

如皋本では主人公の名前は魏九榮、南通本では魏志成であり、これについては曹琳氏が校記①で「通州一帯の童子は魏九郎を魏志成と呼び、海安県一帯では魏九榮と呼ぶ」⁵と述べている。このほかにも、魏徴の他の8人の息子の名前、学堂の所在地や先生の名前（天台の袁先生ではなく崑山の呂先生）、奸臣の名前（李道宗ではなく王枢密）など細かな違いは多い。

ii) エピソードの違い

香山五嶽神が後宮で災いをなしたという話は如皋本にはないが、南通童子戯の儀礼には「斬五嶽」があり、南通本ではこれは欠かせない重要なエピソードと考えられる。また南通本では、10日以内に魏徴の身代わりで誰かが三界に行くという設定に最初からなっておらず、話の筋が通りにくい。また、如皋本では太白金星から水浴びを勧められた九郎が凡体から脱するというエピソードがあるが、これも童子が身を清め、「請神」の儀礼を行う上で重要な意味を持つように思われる。

iii) 表現の長短

九郎の人物像であるが、如皋本は九郎と蕭夫人とのやりとりなどが長く、そのやりとりを通じて九郎がいたずら好きで多少乱暴者風に描かれており、程咬金などのようなトリックスター的なイメージがある。九郎と太宗が天文地理について問答する部分は南通本の方

⁴ 注2 前掲田仲書 p862 参照。

⁵ 注2 前掲『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』p168 参照。

が詳細であり、如皋本は省略もあるため意味が取りづらい。また末尾で、九郎が父魏徴を牢から救い出し、魏徴が再び太宗に拝謁する段があるが、南通本は十数句で簡単に描写するのに対し、如皋本は『千字文』の言葉を組み込んだ唱詞で詳細に描写している。

【表1 各種芸能で使用されている単漢字数の比較】

	双状元宝卷 (浙江・紹興)	売青炭 (浙江・嵊州)	九郎借馬 (江蘇・南通)	魏九榮 (江蘇・如皋)	兄妹分裙 (江蘇・如皋)
総字数	17833	3193	4017	9743	9547
単漢字数(複数回)	970	463	529	872	781
下段:累計字数	17503	2640	3616	9341	9205
単漢字数(1回)	330	553	401	402	342
単漢字数(合計)	1300	1016	930	1274	1123

如皋本の「魏九榮出世」について、この作品の主題と文体の特徴を探るために、師茂樹氏の開発したプログラム、Unicode 対応 N グラムツール morogram (<http://www.ya.sakura.ne.jp/~moro/resources/ngram/morogram.html>) 及びその極悪氏が開発した Windows 実行形式版 (<http://hpcgi1.nifty.com/dune/gwiki.pl?p=morogram>) を利用し、筆者が作成した芸能の電子テキストから、出現頻度の高い文字を探ってみることにしたい。

「魏九榮出世」は、全部で 9743 字から構成されており、使われている単漢字の種類は全部で 1274 字 (種類)、うち、2 回以上重複して出現する漢字は 872 字 (累計 9341 字)、1 回のみ現れる漢字が 402 字ある。

これだけでは特徴がわかりにくいので、江浙の他の語り物⁶と比較してみたのが上記の表である。

「双状元宝卷」は、浙江省紹興県に今も残っている宣卷のテキストの一作品で、同じタイトルが越劇などにも見られる。「売青炭」は、浙江省嵊州市 (旧時、嵊県) に伝承される「落地唱書」と呼ばれる講唱芸能の一作品である。「落地唱書」は越劇の形成にも大き

⁶ 「双状元宝卷」は上田望編著『紹興宝卷研究 付「双状元宝卷」校注影印』(平成 18 年度科学研究費補助金特定領域研究/東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成/散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究(演劇班)研究成果報告書, 2007) pp19-68 を参照。「売青炭」は『越劇伝統説唱 落地唱書』(張繼舜搜集整理, 浙江文芸出版社, 1992) pp121-135、「九郎借馬鬧東海」は『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』(曹琳校注, 臺北市施合鄭基金會, 民俗曲芸叢書, 2000) pp168-174 の校訂テキストをを参照している。「兄妹分裙」は如皋の童子戯芸人、冒建華氏が 1995 年に抄写したテキストを利用し、電子化したものである。如皋の童子戯については、上田望『中国伝統芸能の音曲と歌辞の関係についての計量的研究—越境する伝統芸能 江蘇如皋童子戯の事例研究から』(平成 16-17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 2006) を参照されたい。

な影響を与えたと言われる。「九郎借馬鬧東海」は江蘇省南通童子戲の1篇、「兄妹分裙」は「魏九榮出世」と同じく江蘇省如皋市の童子戲の演目である。

【表2 各種芸能で使用頻度の高い単漢字（上位30字）】

	双状元		売青炭		九郎借馬		魏九榮		兄妹分裙	
1	我	397	白	85	龍	79	不	119	人	206
2	人	348	儂	57	一	66	人	116	一	143
3	兒	262	我	48	馬	61	一	114	了	141
4	來	259	唱	46	不	55	九	107	不	140
5	不	206	來	45	的	54	魏	104	來	123
6	你	204	一	38	來	47	天	100	我	118
7	一	199	勿	38	九	41	上	98	親	100
8	娘	193	哩	37	了	41	家	97	家	94
9	是	176	哥	33	你	39	來	95	你	89
10	上	162	小	33	到	38	你	92	心	89
11	子	155	好	31	海	38	了	91	是	88
12	生	152	要	29	魚	38	郎	89	門	80
13	老	152	三	27	有	37	我	82	女	74
14	有	139	是	27	子	35	下	71	上	72
15	親	137	郎	24	我	35	三	70	妹	72
16	心	135	朝	23	頭	34	子	70	在	70
17	家	134	頭	20	大	32	金	68	叫	69
18	個	120	丹	19	郎	32	大	66	子	68
19	母	118	伊	19	將	31	請	66	到	67
20	日	117	手	19	王	31	門	61	兒	59
21	在	115	牡	19	要	31	王	60	娘	59
22	爲	111	辦	19	三	29	心	59	大	57
23	保	110	人	18	個	29	去	58	父	56
24	見	108	大	18	把	29	書	58	生	55
25	了	105	得	18	人	28	朝	57	下	54
26	去	103	有	18	是	28	在	55	聲	54
27	大	102	做	17	借	27	到	54	母	53
28	悲	102	起	17	得	25	星	54	有	52
29	到	99	出	16	水	25	能	53	身	52
30	官	98	十	16	東	24	叫	52	元	51
	17833		3193		4017			9743		9547

各作品の題材も分量（総字数）も異なるため、単純に比較はできないかもしれないが、「魏九榮」で使われている単漢字が 1274 字（種類）というのは、作品の長さの割に特に多いという訳でもなく、これらの講唱芸能の中では平均的な難しさであると言えよう。もちろん、小説、特に長篇小説などと比べれば、読者（聴衆）にとってはるかにわかりやすいものであることは言うまでもない。

次に、「魏九榮」及び各種の講唱芸能で、どのような単漢字の使用頻度が高いのかを整理したのが以上の表である。これを見ると、「魏九榮」についていくつかその特徴が浮かび上がってくる。

i) 一人称、二人称代名詞の少なさ

一人称代名詞である「我」や、二人称代名詞である「你」「が」上位に来ることは、講唱芸能の特徴であり、小説ではさすがに人称代名詞は上位 20 に入っていない⁷。ただたとえば浙江の「双状元」では「我」が堂々の 1 位、「你」が 6 位であり、テキストの総文字数に対する「我」の出現頻度を見ても、「魏九榮」は「双状元」と比較して三分の一程度であり、全体的に浙江の芸能に比べ、如皋・南通の童子戯は人称代名詞の使用頻度が低い。童子戯には登場人物の視点から唱う唱詞や白が少なく、代言体の性格が他の芸能よりも弱いと考えられる。

ii) 親子関係（特に母子関係）を表象する文字の多さ

人称代名詞を除けば、「人」などの一般名詞、数詞の「一」、動詞の「來」、「是」、「有」などが上位に来るのは、他の講唱芸能のみならず小説でもよく見られる特徴である。ただ、「魏九榮」や同じ如皋の「兄弟分裙」、「双状元」では、家族関係や親子関係を表象する「家」、「親」、「児」、「子」、「父」、「母」等の文字が目立っている。

そこで、この点について考察するために 2 文字から構成される熟語についてもバイグラムを取り、その出現頻度を見てみることにする。

【表 3 各種芸能で使用頻度の高い 2 字熟語（上位 30 字）】

	双状元		売青炭		九郎借馬		魏九榮		兄妹分裙	
1	狀元	69	牡丹	19	九郎	32	九郎	72	狀元	48
2	孀娘	62	哩哩	17	龍王	21	魏徵	37	父親	28
3	夫人	54	哥哥	13	龍宮	17	唐王	28	子玉	27
4	今日	45	小環	13	聽說	15	丞相	27	桃梅	27
5	母親	45	朝奉	13	龍馬	13	萬歲	23	大人	24
6	孩兒	44	今朝	9	一個	11	請神	22	母親	24

7 上田望「『三国演義』の言葉と文体」（『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 25 号、2005）pp25-44 参照。

7	母子	40	三番	7	三姐	11	父親	21	兄妹	23
8	大人	39	娘舅	7	將軍	10	魏家	21	原因	23
9	天保	38	店堂	7	葫蘆	10	回家	19	妹妹	22
10	親生	38	看見	7	借馬	9	天子	19	老爺	21
11	我兒	36	青炭	7	夜叉	8	什麼	17	聽說	20
12	老爺	33	匠手	6	東洋	8	天牢	17	賽金	20
13	官人	32	外甥	6	唐王	7	先生	15	和尚	18
14	素珍	32	令令	5	東海	7	叫聲	15	員外	18
15	萬歲	30	師傅	5	老龍	7	母親	15	一個	17
16	不表	29	整天	5	兵器	6	一聲	14	安人	16
17	兒子	29	阿哥	5	好像	6	三界	14	家門	16
18	未知	27	今日	4	東西	6	夫人	14	回家	15
19	如此	26	只要	4	當時	6	孤家	14	夫妻	15
20	媽媽	26	喔唷	4	綠石	6	聖旨	14	北樓	14
21	張媽	26	大安	4	龍駒	6	大人	13	叫聲	14
22	爹爹	26	好比	4	一匹	5	九榮	12	單氏	14
23	先生	25	就是	4	不是	5	寡人	12	親娘	14
24	王爺	25	早飯	4	借龍	5	欽差	12	龍麵	14
25	老夫	25	篤篤	4	兩個	5	肖氏	12	不是	13
26	一個	24	調戲	4	四海	5	金星	12	姑娘	13
27	保佑	24	豆腐	4	大口	5	蘭溪	11	什麼	12
28	瑞祥	24	買主	4	潮水	5	一個	10	不知/悲聲	12
29	娘親	23	起來	4	請神	5	不是	10	修心/心中	12
30	老身	23	銀子	4	鞍配	5	主公	10	小姐/急忙	12
	17833		3193		4017			9743		9547

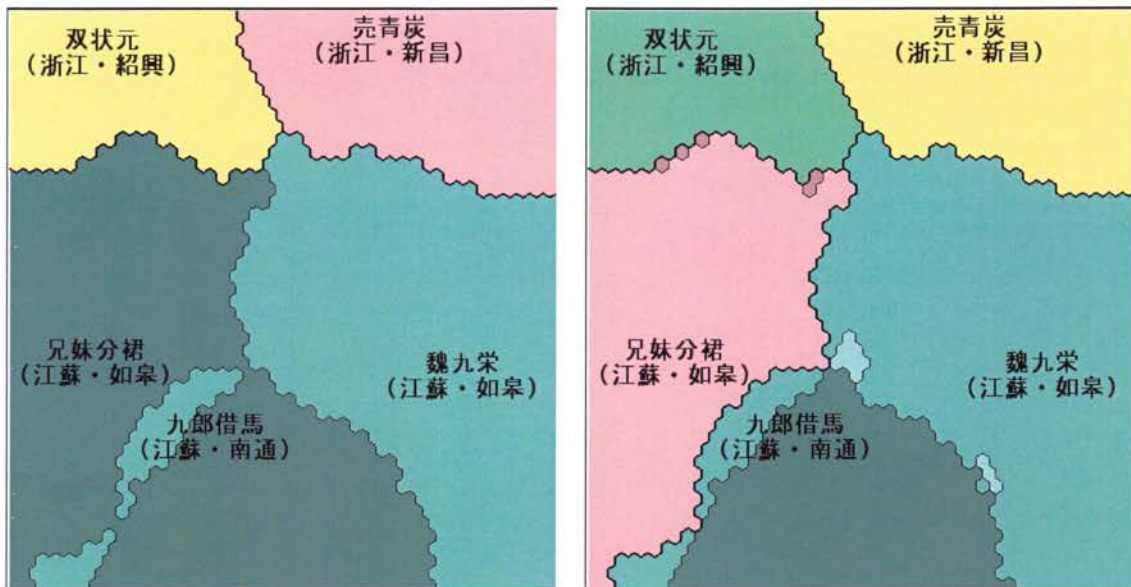
「魏九榮」の場合、この作品のタイトルに近い「九郎」や「魏徵」が1、2位をしめるのはある意味当然であろう（「双状元宝巻」は「状元」が2字熟語の頻度でトップである）。

このほかには、「唐王」、「萬歲」、「天子」、「聖旨」など皇帝に関する語彙が非常に目立つほか、「請神」という語彙が6位にランクインしている。これは、「魏九榮」が他の作品とは違い、神おろしをする祭祀儀礼的な性格が強いテキストであることの証左であろう（なお、「九郎借馬」でも「請神」は29位に入っている）。それと、「父親」、「母親」という言葉の多さも特筆に値しよう。「魏九榮」の場合、天牢という「地獄」に落とされた父親（魏徵）を息子（九郎）自身がシャーマンとなって救済するというモチーフと孤魂超度劇の構造があることが言葉の点からも伺い知ることができよう。その裏返しは「双状元」であり、乞食（餓鬼）となって彷徨う「母親」の救済がこちらではモチーフとなっている。

如皋の童子戯は、今回調査した限りでは、個人的な消災や土地廟などの儀礼よりも、父

親、母親の法事で上演される機会のほうがむしろ多く、こうした上演環境が、作品の主題にも投影されていると言えるのではないだろうか。

最後にこの5種類の芸能の関係についても、少し言及しておきたい。今回、電子テキストを整理した5種類のテキストをあわせ、全体の中で使用頻度の高い10文字(人、我、來、一、不、你、了、兒、是、上)について、それぞれのテキストにおける出現頻度を算出した。そしてそれらを変数として、クラスタリングの理論を応用した「自己組織化マップ」(SOM-MAP)により各テキストの親疎関係を解析したものが以下の地図である。



【マップ1 3クラスター分割】

【マップ2 4クラスター分割】

SOMのプログラムはこの5種類の芸能の関係を3、5のクラスター(塊)に分類するのが適当と判断しているため、3つのクラスターと4つのクラスターに分けた場合、それぞれどのような分かれ方をするかを見るため、2つのマップを挙げている。

2つのクラスターに分けると、まず最初に「売青炭」が他の4つから分かれ、3つのクラスターに分けると、今度は「双状元」が分かれて独立することから、浙江の芸能と江蘇の芸能ではまず大きな違いがあることがわかる(マップ1参照)。さらに4つのクラスターに分けた場合(マップ2参照)、如皋童子戯の「兄弟分裙」が同じ如皋の童子戯「魏九榮」や南通童子戯「九郎借馬」から分離独立していく。同じ内容の作品が同じということ、厳密に言えば如皋と南通、それぞれ別系統であるが、この2つが最後まで残って結びついているのであろうと考えられる。

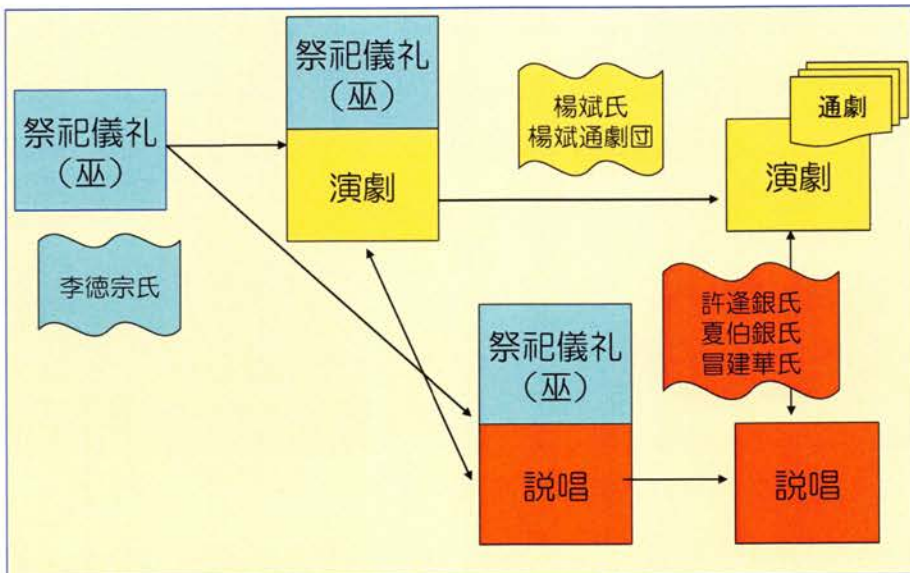
今回は、海州、揚州、張家港、金湖など江蘇の他地域の童子戯(香火戯)について電子テキストを使った分析できなかったが、電子化した音曲のデータを使って同様の手法でクラスタリングすると、南通系統の童子戯の音楽と、海州系統の童子戯の音楽、揚州系統の童子戯の音楽はそれぞれ固まって独立したクラスターを形成し、如皋の曲はそれぞれのクラスターに分散するかたちになるため、テキストについても同様の結果が得られるのかどうか、さらにデータの収集、整理と検証を続けていきたい。

4 小結

現地調査で得た如皋童子戯に関する諸資料を南通童子戯などの先行研究に照らし合わせながら、上演環境・儀礼、テキストの角度から考察してきた。

儀礼からみた場合、南通の童子戯から比べると如皋の童子戯は呪術的な面が衰退している面は否めないが、南通の童子戯で後から加わったと考えられる孤魂超度の儀礼がないなど、南通とは早い時期に分かれて別のかたちで発展してきたとも考えられる。またこのような儀礼が形を変えて復活し、如皋ではあちこちで行われているということも、驚くべきことである。

江蘇如皋童子戯の発展形態



また、如皋童子戯と南通童子戯のテキストの差異については、両者の間に石印鼓詞などが介在している可能性もあるが⁸、如皋と南通とで共通する祖本からそれぞれが自分たちの上演環境に合わせてテキストを改変してきたことは間違いない。また所謂「十三本半巫書」以外の「珍珠塔」など一見娯楽にみえる演目についても、その地域社会における意味とあわせて今後、テキスト分析や伝承形態を考察していく必要がある⁹。

最後に、以下は今回の調査の感想に近いが、如皋で調査を実施した後、筆者が南通童子

⁸ 大塚秀高氏は南通童子戯の抄本が、民国初期に上海の椿蔭書荘（局）などから石印鼓詞として出版されていた事実を明らかにしている。大塚秀高「中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵の「石印鼓詞」について－「石印鼓詞」と「童子戯」（『饜饕』第8号，2000）参照。

⁹ 海州の童子戯は百種類近くの出し物を持ち、そのうち海州童子戯特有でない出し物としては、徽劇・京劇や海州一帯の地方劇である淮海劇から移植、改作された「下河東」、「粉河湾」、「双富貴」等がある。朱秋華著、小松謙訳「海州童子戯考」（『日中文化研究2』，勉誠社，1991）pp115-116 参照。

戯の研究から事前に得ていた童子戯のイメージは大きく変化した。南通の童子戯は儀礼・演劇など諸々の要素を含む総合芸術（芸能）であるが、如皋の場合、童子戯は極端に言えば儀礼専門、演劇専門、唱書専門の3タイプに分かれてしまっている。これは改革開放後、それぞれの分野で需要が生まれ、その需要に応えるため、供給側も特化していったことが一番の原因であろう（習得期間が短いことも関係している）。

また本論文の中では「如皋童子戯」という言葉を頻繁に用いたが、如皋という行政上の地域の枠組みで考えることについて若干、疑念が残っている。如皋の上演者は南通を初め他の地域の師匠から儀礼、テキスト、音楽などを学ぶ一方で、自身や弟子を含め如皋以外の地域にも活躍の場を求め、また営業活動を展開している。これまでも如皋の童子戯は儀礼、テキスト、音楽それぞれ別個に各地と交流し独自のスタイルを築き上げてきた節があるが、今後はますますジャンルや地域の垣根を超えた交流と融合が進んでいくと予想される。「越境」していく現代中国の伝統文化、大衆文化をどのようにとらえるか、これは21世紀の我々にとって大きな課題となるであろう。 （完）

